
いらっしゃいませ！タムラベーカーリーへようこそ

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いらっしやいませ！タムラベーカーリーへようこそ

【Nコード】

N7974K

【作者名】

やじ

【あらすじ】

商店街のほずれにある小さなパン屋、タムラベーカーリー。そして突然パン屋で暮らすことになった、田舎者の僕。その店には母親の花子さんと、こむぎ、あん、ちよこの3人娘が住んでいた。パンのように温かくてほんわかした家族の中で、次女のおんだけが僕に冷たい。そんなあんと僕と家族の、笑えて泣ける毎日のお話。

1 彼女と別れて彼女と出会う

『一寸先は闇』 未来のことは全く予測することができないことをいう。

たとえば、さっきまで元気に過ごしていた人間が、今はもうこの世にいないとか そんなこと、考えてもみなかったけど、もしかしてそういう話は、特別めずらしい話でもないのかもしれない。

僕だっつてつい最近まで、普通に学校へ行き、友達とバカ話して、彼女と笑って、親の作った夕食を食べて……それが今では、すべてが変わってしまった。

雪がまだ残る田舎町の、小さな小さな駅のホームで、セーラー服を着た僕の彼女が泣いている。

「……もう泣くなよ、理衣子」
「だっつて、だっつて……」

理衣子はさっきからずっとその言葉を繰り返している。

「なんで幸ちゃんがこの町出なくちゃいけないの？」

「しょうがないよ。うちの両親、死んじゃったんだし」

ひとつごとみたいにそう言ってみた。理衣子の目からさらに涙があふれる。

「幸ちゃん……かわいいそう……」

僕はそんな彼女の冷たい手をそつと握る。

「大丈夫だよ。離れていても……大丈夫だよ、俺たちは」
理衣子が真っ赤な目をして僕を見つめる。

「電話する。手紙も書くから。だから……」

遠くから電車の音が聞こえてきた。理衣子は僕の手を静かに離す。
「ごめん……あたし、自信ない……」

理衣子の震える声が、ホームに滑り込んでくる電車の音と重なった。

走り出した電車の窓に、見慣れた町の景色が流れてゆく。雪のちらつくホームに立つ理衣子は、最後まで僕の顔を見なかった。

「俺だつて……東京なんて行きたくないよ……」

窓の外に映る白い雪が、ぼんやりとかすんでいく。

僕は電車の中で泣いていた。電車の揺れに身を任せて、声を押し殺して、一人ぼっちで泣いていた。

「タムラベーカリー……ここかぁ」

小さな紙切れに書いてある住所だけを頼りに、僕はなんとかそこにたどり着けた。

東京の下町の、昔からあるような商店街のはずれに、小さなその店は建っていた。

店の中から漂ってくるのは甘いパンの匂い。僕の腹ペコのお腹がたまらなく音を立てる。

「あの一」

ドアを開けて中を覗く。店番をしていた背の高い女が、にこっと微笑んで僕を見る。

「いらっしやいませ!」

「いや、あの、僕、富樫つていいいます。今日からこの家でお世話になる……」

「ああ、あんたが」

女の表情が一変した。にこやかな接客スマイルから、無愛想な素に戻ったって感じ。

女は僕に近づいて、じろじろと見ながら言った。

「あんた料理作れる?」

「え?」

料理? そんなもん、作ったことない……

「我が家はね、この通り店をやつて忙しいの。だから夕飯の支度は当番制。『働かざるもの食うべからず』つてところよ。わかる?」

「は、はい」

「で、あんた料理作れるの？」

「なんだかよくわからないけど、ここは作れるって言うておいたほうがよさそうだ。そうしないと、僕は路頭にさまようことになるだろう。」

「少しくらいなら」

「んじゃ、今日の当番、あんたね」

「女はミッキーマウスの絵がついた、大きな財布を僕の胸に押し付ける。」

「買い物も後片付けも、全部あんたがやるんだよ」

「か、買い物ってどこで？」

「女がわざとらしいほど大きなため息をつく。」

「あんた駅から歩いて来たんでしょ？」

「はい……」

「だったら商店街通って来たでしょうが？八百屋も肉屋もあったでしょ？」

「ああ、そういえば……」

「んじゃ、よろしくね」

「その声と同時に店に客がやってきた。」

「いらっしやいませ！」

「女が裏声でそう言うて、にこやかな笑顔を見せた。」

1 彼女と別れて彼女と出会う（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

突然ですが、みなさんパンは好きですか？

作者は大好き　パン屋でのアルバイト経験もあり…というわけで？）

今回はパン屋さんが舞台です。

お暇な時間がありましたら、のぞいてやってくださいね。
よろしく願います。

2 恐ろしくまずいカレーと田村家の人々

生まれて初めて大都会へ出てきた僕に、いきなり夕飯を作らせる女って……何時間もかけてやっとたどりついた傷心の僕に、何か他にかけ言葉とかないのかよ？それとも東京の女って、みんなこうなのか？

商店街で、じゃがいもとにんじんと玉ねぎと肉を適当に買った僕は、またタムラベーカーリーの前まで戻ってきた。

「はあ……………」

両手に材料をぶら下げて、思わずため息をついた時、誰かが僕の背中をポンポンと叩いた。

「もしかして君、富樫くん？」

振り向くと、紺のブレザーにリボン、そしてミニのスカートという、制服姿の女の子が僕を見ていた。高校生？まさか中学生じゃないよな？肩までのふわふわした髪は、染めてるみたいに茶色いし、化粧もしてるみたいだし……

「ちがうの？」

「いえ、そうです。富樫幸とがしゆきです」

「やっぱり！あたしこの家の三女、ちよこ。チョコって呼んでね！」
ちよこって子はそう言っ人懐っこい顔で笑うと、僕のことを頭からつま先まで観察した。

「うん。まあまあってとこかな？」

まあまあって……なにを基準に？

「それなに？」

「ああ、店の中にいた人に、今夜の料理、僕が作れって」
「うわ、あん姉ねえってば、自分の当番、人に押し付けたな？」
ちよこが僕を指差して言う。

「君、あん姉にごまかされたんだよ。かわいそうに。いい人そうだもんね、君」

「はあ……」

どうでもいいけど、いい加減家に入れてくれないかな？僕、長旅で疲れてるんですけど。

「ふふっ、まあ、入って。女ばかりの家だけど」

僕の心を察したのか、ちよこがパン屋の裏へ案内してくれた。店の裏口から続いている小さな庭を通ると、古い一戸建ての家が見える。そして僕はようやく、これから暮らすことになる田村家へ、入れてもらえたのだ。

「ごめんなさいねえ。私がいれば、夕飯の支度なんてさせなかったのに」

6畳の和室の真ん中にテーブルがひとつ。その上に僕の作ったカレーライスが並んでいる。

「いえ、大丈夫です」

「まったく……あとであんにはこっそりお仕置きしておくからね」
僕の前でそう言うってくれるのは、この家の長女、こむぎさん。彼女はいつも夕方には店に出ているそうだけど、今日に限って出かけていたという。しかしどうみても、このおっとりとした雰囲気の人にお仕置きされても、怖くはないだろうなって思うのは、僕だけだろうか？

「幸ちゃん、今日は疲れたでしょ？お風呂沸かしといたから、ご飯食べたら入りなさいよ」

そう言っつて和室に現れたのは、亡くなった旦那さんの残したタムラベーカーリーを、娘と一緒に切り盛りしている、お母さんの花子さん。

花子さんとは僕の両親の葬式の日に出会った。その前にも、僕が小さい頃、この家に遊びに来たことがあるらしいけど、それはよく覚えていない。両親を事故でいっぺんに亡くした僕は、親戚の大人たちの話し合いによって、どういっわけか、遠い親戚にあたるこの家に引き取られることになったのだ。

「ねえ、とにかく食べようよ！あたしお腹すいちゃった！ユッキーもそうでしょ!？」

ちよこがそう言っただけに笑いかける。ユッキーって……僕のこと？「そうね、じゃあいただきますしようか」

テーブルにみんなが集まる。花子さん、こむぎさん、ちよこ、そして僕。

「いただきますー！」

全員で口をそろえ、スプーンを手に取る。僕がカレーを口に入れる。ん？なんだ？この味……ちゃんと市販のルーで作ったのに……

「うげっ……み、みずっ」

こむぎさんが僕に水を差し出す。僕は水と一緒にカレーを一気に飲み込んだ。

ま、まずい……まずすぎる……やばい、こんなもん、みなさんに食べさせるわけには……

顔を上げた僕を、周りのみんなが見ていた。誰もスプーンを手にすることなく、ただじっと、僕のことを観察していた。

「やっぱりね。まずそうな色してるもん」

ち、ちよこ……

「そうねえ、匂いもなんかへんだしね」

は、花子さんまで……

「よかった、食べなくて」

こむぎさん……天使のような笑顔で、そんなこと言わないで……その時、和室にあの女がやってきた。僕にカレーを作らせた女、

次女のあん。

「店の片付け終わったよー。お？今日はカレーか。いただきますーすー！」

みんなの視線があんに集まる。一口食べたあんの顔色が変わる。

「これ作ったの、誰？」

「……ぼ、僕ですけど」

「食えるかこんなもん!！」

テーブルの上にスプーンを叩きつけ、あんが部屋を去ってゆく。
な、なんだよっ！お前が作れって言ったから、作ったんだろぅが！
怒りに震える僕の前にラーメン屋のメニューが差し出された。

「今日、出前にするよ。幸ちゃん、なににする？」

花子さんが何事もなかったように、僕の前で微笑んだ。

3 どんな名前だつて大事な名前

疲れた……めちゃくちゃ疲れた……

2階の隅の、日当たりの悪そうな4畳半の和室が、僕に与えられた部屋だった。だけど居候の僕に文句は言えない。部屋をいただけただけ感謝しなくてはいけない。

部屋の壁にはクレヨンで、花に囲まれた男の子と女の子の絵が描かれている。3人娘の誰かが、小さい頃に落書きしたんだろう。そしてその壁の前に、先に宅配便で送られてあったほんの少しの僕の荷物が、ダンボールに入ったままつまれている。

僕はその中のひとつを何気なく開いてみた。すると、本やノートの入ったその荷物の一番上に、教室で友達と撮った写真が乗っていた。

「理衣子……」

理衣子は僕の隣で笑っている。こんな未来が来ることも知らずに、幸せそうに笑っている。

僕はその写真をまたダンボールの中に戻すと、水を飲みを下へ降りた。

家中が寝静まったはずの台所に、かすかに灯りがついている。僕は不思議に思いながら台所をのぞく。

「あ」

僕の声にあんが振り向く。彼女は僕の作ったカレーライスをごっそり食べていた。

「く、食ってる……」

「なんだよ？腹減ったから食ってるの！悪い？」

「いえ、べつに……」

僕があんの横を通り過ぎ、水道の蛇口をひねる。静まり返った台所に、水の落ちる音が響く。

「あんだ、まだ起きてたの？」

あんの声が背中に聞こえた。

「ちよつと……眠れなくて」

「ふうん」

僕はコップに水を注ぐと、一気にそれを飲み干した。体の中がひんやりと冷めていく。

「それじゃ……」

振り向かずにその場を立ち去ろうとした僕を、あんが呼び止める。

「ちよつと、あんだ」

「はい？」

僕がゆっくりと振り返る。スプーンを持ったままのあんが、僕のことをじっと見ている。

「あんだ何て名前だっけ？」

「富樫……」

「それは知ってる」

「幸」

「ゆき？」

「そう、ゆき」

「ぶつ、女みたいな名前」

う、うるせー！僕の一番気にしていることを！

「あ、あんだこそ『あん』なんて、変な名前だな！」

僕の声にあんの顔色が変わった。え、もしかして、まずいこと言った？しかし時すでに遅し。僕は立ち上がったあんに、襟元をつかみ上げられていた。

「てめえ、あたしの父さんがつけてくれた名前にケチつける気がよ！？」

「ちよ、ちよつと離して……」

「『あん』は『あんぱん』の『あん』だよ！悪いかよっ！」

あんが僕の体を突き放す。僕は勢い余って床にしりもちをついた。も、もう怒ったぞ！この女っ！

「だったら俺の名前にもケチつけんなつ！この名前だって、俺の父さんが俺のためにつけてくれた名前なんだぞっ！」

そうだ、そうなんだ。前はこんな女みたいな名前イヤだったけど……父さんが死んでしまった今ならわかる。僕が誰よりも幸せになれるようにって、つけてくれた大事な名前。

あんが僕のことをじつと見ていた。はっと気がついて、服の袖で顔をこする。いつの間にか僕の目からは涙があふれていたから。

「ふん、泣き虫」

あんがそう言って台所を出て行く。僕は薄暗い台所の床に座ったまま、テーブルの上にある食べかけのカレーライスを、ただぼんやりと見つめていた。

4 げ!?!いつと同じ学校に?

「朝は母さんとこむぎ姉ねえ、店の支度で忙しいから、適当に食べてっ
てね」

ちよこがそう言つて、テーブルの上を指差す。そこにはできたての香りただよう、おいしそうなパンが……ああ、パン屋の朝は、やつぱりこうでなくちゃな。

「じゃあ、あたし部活あるから。ばいばい、ユッキー」

ちよこが僕に手を振つて台所を出て行く。

「行つてらっしやい、チヨコちゃん」

高校生だと思つていたちよこは、まだ中学生だった。東京の中学生はませてるなあ……なんて、驚きながら、僕はテーブルにつく。

うーん、つまそー、どれから食べようかな……焼きたてバターロールにクロワッサン、ふわふわの食パン……僕がパンのひとつに手を出した瞬間、すばやくそのパンは目の前から消えていった。

「あんたはこつち。昨日の売れ残りで十分」

僕の前に現れたあの女。

「なんだよ、適当に食べていいつて言うから……」

「だから売れ残りがあるでしょ? 焼きたてはあたしが弁当に持つていくの!」

くっそー、えらそうに……しかしこいつにかかわるのはやめておこう。昨日のようなことになるのはまっぴらごめんだ。

僕は昨日の売れ残りだというあんぱんを一口食べる。

「う、うまい!」

マジでうまい! こんなうまいパン食べたの、17年生きてきてはじめてかも! だけど、どこか懐かしい味がするのはどうしてだろう? 「でしょ? うちのパンはどれもおいしいのよ」

あんが自慢げにそう言う。確かに、パンの味だけは、お前の言うとおりだよ。

「で、食べたら行くからね」

「は？どこに？」

「学校に決まってるじゃん」

あんが僕の前に座って、一緒に昨日のあんぱんを食べる。共食いじゃねーかって思ったけど、それは口に出すのはやめておこう……

「学校って？」

「だから学校！あんた高校生なんでしょ？」

「でもあとで花子さんが一緒に、転校手続きとかしてくれるっていうから」

「母さん忙しくて、仕事抜けられなくなったの。だからあたしが一緒に行ってあげる。どうせ同じ学校なんだし」

げー！こいつと同じ学校に通うのか！？そういえばこいつちゃん制服着ているな。黒のブレザーにチエックのリボンとチエックのスカート。なかなかかわいいじゃん。制服だけは。ていうか、こいつ高校生だったのか！？

「あの、ひとつ聞いていいですか？」

「なにを？」

あんがパンをほおばりながら言う。

「あん……さんは、何年生？」

「高3」

げげー、僕と同じ！？

「ふけてるから、年上かと思ってました」

そう言った瞬間、僕の頭にあんの鉄拳が飛んできた。

鏡の前でネクタイを締める。前の学校は学ランだったから、新しい制服を着た僕は、なんだか自分じゃないみたいだ。

もたもたと支度をして玄関へ行くと、恐ろしい顔をしたあんが怒鳴った。

「おそいー！」

「1じめ……」

するとあんの手が僕の首にかかった。マジ？僕はこいつに殺されるのか？

しかしそんなことはあるわけなく、あんは慣れた手つきで僕のネクタイを直してくれた。

「行くよっ！幸！」

「う、うん」

完全にこいつのペースに巻き込まれてる僕。なんか悔しいなあ……

するとあんが庭先から自転車を引っ張り出した。

「後ろ乗りなよ」

え！？チャリ？こいつの後ろに？

「早く！遅刻しちゃうだろ！」

僕があんの体を軽く押しつける。

「俺が運転するから、道教えて」

自転車にまたがる僕の背中を、あんがきよとした顔で見ている。

「ほら、早く！遅刻しちゃうんだろ！？」

こいつの後ろに乗せてもらうくらいなら、自分で運転したほうがはるかにましだ。

僕は意外とおしとやかに横座りしたあんを後ろに乗せ、自転車のペダルを思いつき踏み込んだ。

5 悪魔なのか？天使なのか？

どこことなく、生まれ育ったあの町を思い出す川沿いの土手を、僕たちは自転車で走った。桜の木の下を通るたび、満開に咲いた花びらが、ちらちらと頭の上に舞い落ちる。それは理衣子と別れた日にホームで見た、なごり雪に似ていた。

「お、重い……」

「なにが言った！？文句あるならここに置いてくよ！」

あいかわらず偉そうな態度のお嬢様。

僕はちらりと後ろを振り向く。あんは長いストレートの黒髪を春風になびかせながら、遠慮がちに僕の制服をちよっとだけつまんでいた。

学校に近づくと何人もの生徒があんに声をかけてきた。

「おはよー、あん！」

「おはよっ」

彼女は意外と人気者のようだ。しかし誰もが、自転車をこいでいる僕のことを不思議そうに見ている。僕はその視線に耐え切れなくなつて、自転車を止めた。

「ここから歩いていくよ」

「なに言つてんの？一緒に行つてやるつて言つたでしょ？」

「一人で大丈夫だから。じゃあ！」

僕があんに自転車を任せ、歩き出した。

「あんー！誰？あの子」

「ああ、うちに居候することになった、親戚の富樫」

「転校生？かわいくない？」

「全然」

あんの周りには友達らしき女子が集まっている。僕はそんな彼女たちの視線から逃げるように、早足で学校へ向かった。

ああ、神様はどうして僕にこんな試練を与えるのだろうか。

「転校生の富樫くんです」

黒板の前に立つ僕の視界に、あんのむすつとした顔が見える。

「富樫くん、何か一言」

「あ、あの、富樫幸です。どうぞよろしくお願いします」

教室からくすくすと笑い声がもれる。あれ、なんかヘンだったかな？名前が女みたいだから？それとももしかして、なまっつたかな？くそつ、だからやなんだよ。こんな目立つところに立つのは。

「富樫くんは、田村さんの親戚なのよね？」

担任の女性教師がにこやかに言う。

「じゃあ、席は田村さんの隣に……わからないことはなんでも田村さんに聞いてね？」

「げ！なんでだよ！？家でも一緒、学校でも一緒かよ！？」

僕があんと同じようにむすつとした顔で席につく。あんは前を見たままつぶやく。

「学校でなれなれしくしないでよ？」

「は？」

「あたしになれなれしくしないでよ？」

するかっ！頼まれてもするかっ！お前なんか無視だ！無視！

その日の午前中、僕は誰からも声をかけられなかった。もちろんあんからも。東京の人間って冷たいんだな……そして昼になって僕は気がつく、弁当を持ってこなかったことに。

ポケットの中には20円。はあー、今日は食わないでいいか……てか、食えないし……

僕は今まで何気なく食べていた、母さんの作ってくれた弁当を思い出す。「ありがとう」なんて一度も口にしたことなかったけど、今になってそのありがたさに気づくなんて、もう遅いよな。

クラスの笑い声中で、ぼんやりと一人外を眺めていた僕の前に、

何かが差し出された。ふと机の上を見ると、そこには今朝の焼きたてパンが……

「あん？」

あんの背の高い後ろ姿が、僕の前から消えていく。僕は何もトツピングのされてない、真っ白な食パンを一口食べる。その瞬間、甘くいい香りと味が口の中に広がった。

「おいしい……」

涙が出ないようにかみしめながら、僕はパンをほおばった。

6 あんの彼氏、登場！？

帰りはとぼとぼ歩いて帰った。僕もチャリが欲しい……でも自分からそんなこと言えないし……

商店街を抜けると甘いパンの匂いが漂ってくる。あんはもついるのだろうか。やっぱりさっきのお礼、言うべきだろうな……

店の中をのぞきこむと、エプロンをつけたちよこが僕に手を振った。

「おかえりー！ユッキー」

「ただいま。今日はチヨコちゃんが店番なの？」

「そうだよ。店番はあん姉と順番だからね」

そしてちよこは僕に焼きそばパンを差し出した。

「お腹すいたでしょ？これ食べなつて、母さんが」

「うわ、いいの！？腹減つてたんだよな」

「ありがとう」

僕はパンを受け取ってから、店の中をきよろきよろと見回す。え

つと、あんは今、どこに……

「あん姉だつたら家にいるよ」

「あ、ああ、そう？」

「彼氏来てるから、邪魔しないようにね？」

「うん、わかつ……て、彼氏！？」

「そう彼氏」

ちよこがにこにこ笑いながら僕を見る。僕は苦笑いしながら、ちよこに背中を向けた。

彼氏？あの、暴力女に彼氏？信じられん。信じられんが、興味はある。

僕は静かに家の戸を開ける。カラカラと小さな音が響く。

今、店にはこむぎさんとちよこ。花子さんは仮眠をしているはず

だ。

あんと彼氏……僕は1階をそーっと見回す。いない。やっぱり2階のあんの部屋か？

「なにやっつてんだ……俺」

これじゃのぞきみたいじゃん。僕は一人和室に座って、テーブルの上に焼きそばパンを置いた。けどどうも2階が気になってしかたない。あいつの彼氏ってどんなやつなんだ？

その時2階からどたと階段を下りる音が聞こえてきた。ドキッ……いや、僕は何もしてないぞ？何ものぞいたわけじゃないし……「あれ？お兄ちゃん誰!？」

僕の前に立つのは5歳くらいの男の子。

「え、あの、僕は……」

するとその男の子の後ろに、あんがにゅっと現れた。

「健太！行くよ！」

「うん！」

健太という男の子があんに続いて去っていく。もしか、もしか、ちよこの言ってたあんの彼氏って……

「あ、幸！」

あんが部屋に顔だけ出す。

「あんた明日から店番やってよね！」

店番？店番も当番制かよ？しかし、『働かざるもの食うべからず』だからな。

「わかつたの!?返事は!？」

「わ、わかつたよ」

あんがふつと笑って僕の前から消えていく。くー！ムカつく！なんだよ、あの偉そうな態度は！

僕は立ち上がって縁側から外を見る。あんは健太と手をつないで、にこやかに微笑んでいた。

なんだ、あんな優しそうな顔、できるんじゃないか……僕はぼんやりと、オレンジ色に染まる二人の背中を見送った。

「ああ、健ちゃんはね、近所のお肉屋さんの子なの。お母さんを亡くしてお父さんと二人暮らしだから、時々うちで預かってあげてるのよ」

「そうなんですか……」

僕と一緒に洗濯物をたたみながら、花子さんが明るく言う。

「健ちゃんがね、きつと寂しい思いしてるだろうって、あんが言うてね。今じゃもう、あんの弟みたいなもん」

そう言っつて花子さんが微笑んだ。僕はそんな花子さんを見ながらつぶやく。

「あの、花子さんは……どうして僕なんかを引き取ってくれたんですか？」

花子さんが僕の顔を見た。僕はさりげなく目をそらす。

「この家だっつておじさんいなくて大変だと思うのに……なんで僕なんか……」

「ふふっ、それはね……」

その時、部屋に風呂上りのあんがやってきた。あんは長い髪をタオルで挟んで、ぱたぱた叩きながら言う。

「母さん、風呂空いたよ。入ってきなよ」

「そうだね。じゃあ、洗濯物たたんどいて」

花子さんが言いかけのまま、部屋から出て行く。そしてその代わりに、あんが僕の前に座った。

気になる、気になるじゃないか……そんな、言いかけのまま、行っつてしまうなんて……

「ちよつとあんた！」

「え？」

あんが僕の手から何かをひつたくる。

「バカ！変態！あたしの下着に触るな！」

僕はいつのまにかあんのブラジャーを持っていたらしい。

「お前……意外と胸でかいんだな」

僕の口はいつも一言多いみたいだ。あんの鉄拳が再び飛んできた
ことは言いつまでもない。

7 理衣子からの手紙

パン屋の朝は早い。花子さんとこむぎさんは朝4時に起きて仕込みを始める。昼間は二人で店を切り盛りして、夕方学校から帰ってきた娘たちが店番を手伝う。

タナカベーカリーのパンは、食パンをはじめ、あんぱん、チョコパン、クリームパン……それから花子さん自慢の焼きそばパンに、コロツケパン。食パンで作ったハムサンドに、卵サンド、それから僕のお気に入りのカツサンド。どれも昔ながらの定番パンで、おしやれな店に売っているような、難しい名前のパンはないけれど、みんなおいしくて懐かしい味がする。

僕は店番だけ頼まれて、決して夕飯の支度はするなと言われた。まあ、あのカレーを見れば、誰もがそう言っと思っけど。

その日も僕はとぼとぼと歩いて学校から帰ってきた。最初自転車に乗せてくれたあんも、今では声もかけてくれない。そしていつものように店まで歩き、中をのぞくと、今日の当番のちよこが僕に手招きをした。

「ユツキー、お帰り」

「ただいま」

そしてちよこは僕の前にカツサンドと、一通の封筒を差し出した。

「手紙、きてたよ」

「あっ」

僕はあわててちよこの手から手紙を受け取る。ちよこはニヤニヤしながら僕を見ている。

「女の子からだねえ？彼女？」

「ど、どうでもいいだろ」

「あ、赤くなってる！ユツキーかわいいー」

年下にバカにされてる僕。

「しかも文通？超かわいいー！メールとかじゃないわけ？」

「ケータイ持ってないから」

「ええっ！？持ってないの？」

ちよこに変人みたいに見られた。仕方ないだろ。理衣子だって持ってなかったから別によかったし、今の僕の身分で、「ケータイ買って」なんて言えないし。

「んじゃ！」

僕はちよこからカツサンドを取り去ると、封筒をポケットにつっこみ店を出た。

理衣子からの手紙。理衣子からの手紙……早く、早く中を見たい。

「幸！」

家に飛び込もうとした僕の背中に声がかかる。振り向くと自転車を押したあんが、庭先に立っていた。

「なんだよ！？俺、今忙しいんだよ！」

「忙しい？」

「そう、ものすごく忙しいの！お前なんかにかまってる暇はない！」

そして玄関に飛び込むと靴を脱いで2階へ駆け上った。

あれ？いつも言い返してくるあんの声が聞こえない。ま、いいか。それより早く理衣子の手紙を……

僕は正座して、手紙を畳の上に置いた。

『ごめん……あたし、自信ない……』

あの町を出る日、理衣子は僕にそう言った。そしてあれきり、僕から電話をすることもなかった。きっと僕たちはあのまま終わってしまうんだろうなって思ってたから……だけど、今ここに、理衣子からの手紙がある。もしかして中に書いてあることはショックなことなのかもしれないけど……僕は震える手で封を切って、中を見た。

『幸ちゃん、あの日はごめんなさい。東京なんてあまりにも遠い気』

がして、きつともう幸ちゃんには会えない……幸ちゃんは東京で新しい彼女を作って、もうあたしのことなんて忘れてしまう……そんな気がして……ついあんなことを言ってしまったの。幸ちゃんは、離れていても大丈夫だよって言ってくれたのにね』

僕の頭に、あの雪がちらつくホームで見た、理衣子の泣き顔が浮かんでくる。

『だけどやっぱり……幸ちゃんに会えないと寂しいです』

「理衣子……」

思わず涙がこぼれそうになった。そして最後の行を見て、僕は小さなシヨックを受ける。

『あたし携帯買いました。よかったらメールください』

その下に書かれているのは理衣子のアドレス。ケータイ……メール……突然理衣子との距離が遠く感じた。

「なに？ラブレター」

ビクッ！ビビって後ろを振り向く。そこには手紙をのぞきこむように立っているあんがいた。

「お、お前！勝手に入ってくるなよ！！」

「何度もノックしたよ。ふすまだけど。それなのにあんた返事しないだもん」

「じゃあ入ってくるな！手紙のぞくな！」

「ふん、ものすごく忙しいって、こういうわけだったのね？」

僕は理衣子からの手紙を握りしめて立ち上がる。するとあんの顔が目の前に見えた。僕とあんの身長は同じくらい。いや、あんのほうがほんの少し高いかもしれない。

「出てけ」

僕はそんなあんに向かって言ってやった。

「出てけよっ！」

僕の手が伸びて、あんの胸のあたりを突き飛ばす。一瞬とても柔らかな感触が手のひらに伝わる。しかし次の瞬間、その何倍もの力で僕は押し返された。

「触んな！スケべっ！」

僕は畳の上にしりもちをつく。

「てめえなんか、彼女の手紙読んで一生泣いてろ！」

あんが僕に背中を向けて去っていく。畳についた手を開くと、
理衣子からの手紙がぐしゃぐしゃになっていた。

8 自転車と幼なじみ

「あれ？あん姉は？」

「なんだか、食欲がないらしいよ」

「食欲がない？あん姉にもそんなことがあるのー？」

「ちよこがけらけらと笑っている。僕は何も言わずに箸をとる。

「そういえば幸ちゃん、あんから自転車もらった？」

「え？自転車？」

「こむぎさんが僕の前でうなずく。

「あんがね、商店街歩き回って、いらない自転車探してきてくれたのよ。幸ちゃんが使えるようにって」

「あ……」

それでさつきあんは僕を呼び止めたのか？それなのに僕はそんなあんを無視して……

「ちよつとあんの様子、見てきます」

「幸ちゃん？」

僕は箸を置いて、2階のあんの部屋へ向かった。

「あん？あん、入ってもいいか？」

部屋の中から返事はない。

「あん。入るぞ」

僕は部屋のふすまを開ける。あんはベッドの上で布団に包まっていた。

「あん……」

「うるさい。あっち行ってよ」

あんの声が布団の中から聞こえる。

「自転車……もらってきてくれたんだろ？俺のために……それなのに……ごめん」

あんは何も答えない。

「ありがとな？」

するとあんの消えそうな声がぼつりと聞こえた。

「彼女……いたんだ」

理衣子のことか？

「ああ……うん。でも……」

「でも、なに？」

あんがゆつくりと布団の中から顔を出す。部屋の中が薄暗かったから、あんの表情はよくわからなかった。

「町を出る時、彼女が言ったんだ。『自信がない』って……でも俺は大丈夫だって言った。離れていても大丈夫だって……なのに、今は……」

なぜか理衣子がとても遠く感じる。

「もう……ダメかもしれない……自信がなかったのは、ほんとに俺のほうだったんだ……」

あんが暗闇の中で僕を見ていた。僕はそんなあんから顔を背ける。どうして僕はこんな話を、あんの前でしているんだろう……

「バカじゃないの？」

あんの声が僕の耳に響いた。

「なにも宇宙の果てまで離れ離れになるわけでもないし。もっと自信持ちなよ」

僕は黙ってあんの声を聞いていた。

「大丈夫だよ。絶対」

なぜそう言い切れるのかわからないけど、あんは僕に向かってそう言った。そして布団からがばつと起き上がると、僕を残して部屋を出て行った。

「あー腹減った！ご飯食べよつと！」

あんの背中が明るい廊下へ消えていく。僕は最後まで、あんがどんな顔をしていたのか、見ることはできなかった。

あんがもらってきた自転車は、見た目は古いけど、動きは快適だ

った。僕はスイスイと自転車を走らせ店へ向かう。するとそんな僕の背中に、誰かが声をかけてきた。

「おい、お前！」

聞いたこともない男の声。この街にたいした知り合いもないし、からまれるのはごめんだから、聞こえなかったふりをしよう。

「おい、パン屋の居候！」

僕は自転車のブレーキをかけた。そしてゆっくりと後ろを振り返る。そこには僕と同じ制服を着た男が、自転車を止めて立っていた。恐ろしく体がでかくて、いかにも強そうな、柔道部にでもいそうなやつ……

「あの、誰ですか？」

「俺は伊藤大樹だ。お前と同じクラスだろ！」

伊藤大樹？そういえば、そんなやつ、いたようないような……

「それ、俺があんに譲ったチャリだぞ」

「ああ、それを僕がもらったんです。ちゃんとあんにはお礼言いました」

大樹ってやつが僕の顔をじろじろと見る。なんだかわからないけど、面倒はごめんだ。さっさとこの場を立ち去ろう。すると大樹が僕に言った。

「俺とあんは、10年以上の付き合いなんだ」

「あ、幼なじみってやつ？」

大樹がむっとした顔で僕をにらむ。

「お前、あんと一緒に住んでるんだってな？」

「そうだけど……」

「あんに絶対手を出すなよ？」

だ、誰があんな女に手なんか出すか！こいつ、もしかして……

「もしかしてあんのこと、好きなの？」

大樹の顔が真っ赤になった。なんてわかりやすいやつ。

「うるさい！手を出したら許さんからな！」

そして自転車にまたがると、全速力で走り去っていった。

9 誰にでもキスする男!?

「おかえり。幸ちゃん」

店に駆け込むと、こむぎさんが僕に笑いかけてくれた。こむぎさんの笑顔は癒されるなあ……姉妹なのに、誰かさんとは大違いだ。

「すみません、遅くなって……」

「大丈夫よ」

「僕店番やりますから、こむぎさん休憩してきてください」

「そうね、それじゃあ、そうさせてもらおうかしら」

こむぎさんがエプロンをはずしながら裏口から出て行く。僕はふうつとため息をついて、店の奥のパン焼き場へ入る。そしてそこでむすつとしているあの女の姿を見つけた。

「遅い!!」

「あ、あん……お前、当番でもないのに、なんでここに!？」

「あんた一人じゃ頼りないから、監視に来たんだよ」

「いらねーよ、監視なんて。だいたい客なんて全然いないし……」

「さっきまでものすごく混んでて、あたしとこむぎ姉さん二人でも、めちやくちゃ忙しかったんだからね!」

「ああ、そーですか。さっきはさっき、今は今。」

「ちよつとあんた、聞いてんの!？」

「僕は手を洗いながら、あんを無視して言った。」

「そっついえばさっき大樹とかいうやつに会ったな」

「大樹に？」

「話がそれて、あんの怒りが少し薄れたようだ。」

「幼なじみなんだろ？」

「この商店街の子はみんな幼なじみだよ。大樹は花屋の息子」

「へえー、花屋ねえ……」

「で、大樹がなんだって？」

「俺に、『あんに手を出すな』だってさ」

あんがきよとんとした顔で僕を見ている。この様子だと、大樹の片思いつてとこかな？

「まあ、お前に手を出すなんてこと、人類が滅亡するよりありえないけどな」

はははつと笑ってあんを見る。しかしあんはなぜか切なげな表情で、僕の顔をじっと見ていた。そしてそんなあんが、ゆっくりと僕に近づいてくる。

な、なんだ？このシチュエーションは！？店には客が来る気配がない。ここにいるのは僕とあんのふたりだけ。

僕はある顔で黙って見つめる。大きな瞳に長いまつげ。すうつと通った鼻にピンク色の唇。こいつ、よく見ると、意外と綺麗な顔しているな……今まで気がつかなかったけど。

「幸……」

あんの声がやけに色つぽかった。その瞳はかすかに潤んで、僕を呼ぶ唇は艶々と光っている。やがてあんは僕の目の前でそつと目を閉じた。

「あん……」

あんの唇が僕を呼んでいる。いいのか？本当にいいのか？僕は目を閉じて、あんの唇にそつと顔を寄せた。

ボカツ

一瞬何が起きたかわからなかった。気がつくと、僕はあんの強烈なパンチを顔面にあびて、床にへたり込んでいた。

「てめえ、殺すぞ！！」

クロス？なんで？なんで僕は殺されなくちゃならないのか？

あんはしゃがみこむと、僕の胸ぐらをつかんで立ち上がらせた。

「お前、今、あたしにキスしようとしただろ！？」

「だ、だって、そっちが誘ってくるから……」

「誘われたら誰にでもキスするの！？彼女がいるの！？あたしのことなんて、好きでもないのに！？」

僕の頭に理衣子の顔が浮かんだ。そうだ、そうだよな？僕はなん

であんに、キスなんてしようとしたんだろう……

「あんた彼女と別れな！あんたみたいな男と付き合ってる彼女が、かわいそうだ！」

あんは僕の体を思いっきり突き放した。僕はもう一度、床にしりもちをつく。

「あ、あん……」

「ふざけるなっ！スケベ男！」

あんが僕の前から消えていく。僕はそんなあんの後ろ姿を、ただ呆然と見送るだけだった。

10 迷い道

「もしもし？え？幸ちゃんなの！？」

僕は土手の上の電話ボックスの中で、久しぶりに理衣子の声を聞いた。

「うん、ごめんな理衣子、ずっと連絡しないで」

「ううん。幸ちゃん大変だったんでしょ？新しい暮らしはもう慣れた？」

「まあ……ね」

理衣子の声を聞いてたら、情けないことに涙が出そうになった。

「どうしたの？幸ちゃん……大丈夫？」

「大丈夫、大丈夫。それより俺、ケータイなくて、メールできなくてごめん」

「そっか……でも今日、幸ちゃんの声聞けたから嬉しい」
公衆電話の中にコインがガシャンと落ちる。僕は最後の100円玉を投入する。

「あー、ごめん。今、公衆電話なんだ。もうすぐお金なくなる」
くそっ、メールができればなあ……話したいことはまだまだいっぱいあるってのに。

「そっ……じゃあまた手紙書くね？」

理衣子の声がなんだか遠くに聞こえる。

「うん……俺も書くから」

「幸ちゃんはめんどくさがりだから、きつと書かないでしょ？」

理衣子はそう言って笑ったけど、その声はどこか寂しげだった。

「ごめん……理衣子、ごめん」

「幸ちゃん……」

「ごめん……」

僕はいつの間にか、受話器に向かって何度も謝っていた。

すっかり暗くなった商店街を、自転車を押しながらとぼとぼと歩いた。僕はなんとなくあの家に帰れなくて、学校帰りにぶらぶら寄り道ばかりしていた。花子さんやこむぎさんは帰りの遅い僕のことを、心配してるかもしれないな……

ほとんどの店はシャッターが閉じているか、店を閉める片づけをしている時間だった。僕は肉屋の前を通り過ぎようとして、小さな男の子の姿を見つけた。

「健太……くん？」

「あ、この前のお兄ちゃん！」

店の横にある小さなスペースで、健太はひとりDSで遊んでいた。

「そのゲームおもしろい？」

「うん、おもしろいよ！お兄ちゃんもやる？」

「うん」

僕は健太の隣に腰を下ろした。健太のお父さんらしき人は、店の片付けが忙しそうだ。

「いつもひとりで遊んでるの？」

僕が健太に聞く。

「友達と遊ぶときもあるし、あん姉ちゃんと遊ぶときもあるよ」

「ふうん」

僕はDSの画面を見つめながらつぶやく。

「あん姉ちゃんは優しい？」

「うん！いつもおいしいパンくれるんだ」

「へえ……」

ゲームの中で主人公のキャラクターが倒れた。

「へたくそだなー、お兄ちゃんは。あん姉ちゃんはもっとうまいよ？」

「ははっ、そうかー？」

僕が苦笑いしながらDSを健太に渡したとき、店の中から健太の父さんの声がした。

「健太　！店閉めるぞ！」

「はい！」

健太が立ち上がった、僕に手を振る。

「じゃあね！ばいばい、お兄ちゃん！」

「うん」

僕は座ったまま健太を見送った。

やがて肉屋のシャッターも閉まり、商店街は一気に静けさが増す。ただ僕は立ち上がることができずに、ただぼんやりとその場に座っていた。

「なにやってんの？」

僕がゆっくりと顔をあげる。

「早く帰ってきなよ。いつまで寄り道してるつもり？」

僕の前にはあんが立っていた。

「あん……」

「ほら、立って！」

あんが僕の手を握り、引っ張り上げる。僕はのろのろと立ち上がりあんの顔を見る。

「まったく、世話が焼けるんだから」

「俺のこと、迎えに来たの？」

あんが僕を見てこくっとうなずく。

「さ、帰るよ」

そして片手で僕の自転車を引き、片手で僕の手を握ったまま、商店街を歩き出す。

あんの手は柔らかくて温かかった。僕はいつの間にかその手をぎゅっと握りしめていた。

「迷ってるんじゃないよ。あんたの帰る場所はある場所じゃないでしょ？」

やがて僕の視界に、温かそうな灯りがもった、タムラベーカーが見えた。

11 チョコを救え！

日曜日の朝、僕は机の上に便箋を置いて考えていた。『手紙書くよ』なんて理衣子に言ったものの、なに書いたらいいのかわからない。こんなことなら、もつとちゃんと国語の勉強しておくんだった。「ユツキー！入るよー！」

僕はあわてて書きかけた手紙を教科書の間にはさむ。

「あれー？ユツキー、朝から勉強？」

「まあね。どうせやることないし。チョコちゃんはデート？」

「あつたりー！」

マジ？適当に言っただけなのに。

「ねえ、ユツキー。この服どうかなー？」

ちよこがフリフリの超ミニスカートをはひるがえして、くるりと回る。おおきく開いた胸元から、胸の谷間がちらりと見える。おいおい、まずいだろ？そんな男を挑発するような格好は。

「うーん、かわいいけど……」

「かわいい！？やっぱかわいいでしょー、このスカート！ユツキー見る目あるよー！」

いや、そうじゃなくて……

「あれ、なにこれ」

突然ちよこの手が伸びた。

「あっ！」

あわてて伸ばした僕の手よりも早く、ちよこが机の上の写真を手にとった。

「写真見ながら勉強してたの？もしかしてこの中にユツキーの彼女いるとか？」

「か、返せよ」

「わかった！このユツキーの隣にいる子でしょー！？」

「返せってばー！」

僕の手が写真をひっぱる。
ビリッ。

気がついたら僕の手の中には、切れた写真の半分だけが握られていた。

「あ、ごめん……」

ちよこの声が聞こえる。僕はぼうぜんと、僕と理衣子の間で真つ二つに切り裂かれた写真を見つめた。

「ごめんね？ ユッキー」

「いいよ」

ぶつきらぼうにそう言つて、ちよこの手から写真を奪つ。

「あ、あの、ホントにごめんなさい」

「いいつて！ もう行けよ！」

ちよこがうつむいて僕の部屋から出て行く。もしかして泣かせてしまったかもしれない。中2の女の子を相手に怒鳴ったりして……
だけど、だけど僕の心も泣いていたんだ。

夕暮れの土手に座つて、テープでくつつけた写真を見つめる。結局1日たつても、理衣子への手紙は書けなかった。

どうしてだろう……どうして僕は理衣子に手紙が書けないんだろ
う……

土手の上をユニフォーム姿の野球少年たちが自転車で通り過ぎる。僕は写真をポケットに入れると、ゆっくりと土手を上がつて歩き出した。

あたりは薄暗くなつていた。土手の脇に止めてある車の陰から、男と女の言い争うような声が聞こえてくる。カップルの口げんかか……僕は車の脇を通り過ぎようとして立ち止まった。

「離してよ！」

「うるさい！ 乗れっ！」

車の中に押し込められそうになっている女のスカートに見覚えがあった。

「チョコ？」

男が無理やり女を押し込める。僕は思わず駆け寄って、車の中をのぞきこむ。中では男が嫌がる女の手をつかんで、覆いかぶさっていた。

「チョコちゃん！」

叫びながら車の窓を叩く。涙をためたたちよこの目が僕を見る。それと同時にガラの悪そうな男が車から降りてきた。

「誰だ？お前」

「だ、誰でもいいだろ？その子、嫌がつてるじゃないか」

テレビのドラマだったら、ここでかつこよく彼女を助け出すんだろうけど、あいにく平和主義の僕は喧嘩が苦手だ。とっとちよこを連れて、この場を逃げ出さないと……

「なんだと？」

男が僕の襟元をつかんだ。まずい、殴られる……

「ユツキー！」

「は、早く逃げろっ、チョコー！」

ちよこの泣き顔が僕の目に映る。それをさえぎるように男のこぶしが飛んでくる。僕は目をつぶって思い切り右手を伸ばした。

「いつてえ……」

目の前に倒れている男……あれ？当たっちゃった？

「てめえ、やりやがったな！」

男が立ち上がって僕につかみかかってくる。やばい、やばい、今度こそ本当に殴られる。

「キヤー！誰か助けて！おまわりさーん！！」

その時、僕の耳に聞きなれた声が聞こえた。目の前の男が僕の服をつかんだまま振り向く。そこにはわざとらしいほど大声を張り上げている、あんの姿があった。

「あん姉ちゃん！」

「チョコー！早く警察に電話しな！」

ちよこがポケットから携帯を取り出す。

「け、警察だと？冗談じゃねえ」

男はあわてて車に乗り込み、逃げるように走り去った。僕は全身の力が抜けて、へなへなとその場に座り込む。

「ユツキー！大丈夫!？」

そんな僕に駆け寄るちよこ。そして僕はぼんやりと、ちよこの向こう側にいるあんの姿を見た。あんはしゃがんで何かを拾うと、丁寧に汚れを落として僕の前に差し出した。

「これ、あんだでしょ」

「あ……」

あんの手から理衣子の写った写真を受け取る。あんは今まで見たこともないような、優しい表情を僕に見せたあと、ちよこに向かつて怒鳴った。

「チヨコ！あんだなんであんな男と付き合ってたのよ!？」

「つ、付き合ってたんじゃないもん。ケータイのサイトで知り合つて、いい人そうだから今日初めて会つたんだもん……」

「バカっ！あんだ幸が来なかったらやられてたよっ!」

「……ごめんなさい」

「謝るなら幸に謝りな!」

あんはそう言つと、背中を向けて歩き出す。

「あ、あん……」

あんが僕の声に立ち止まる。

「どうしてここに?」

「あんたを迎えに来たんだよ。またどこかで迷子になつてるんじゃないかと思って」

あんは背中を向けたままそう言つて、またゆっくりと歩き出す。

「あん！待って……」

追いかけてよつとした僕の体を、ちよこが抱きしめた。

「ユツキー、ごめんね?ごめんなさい」

「い、いいよ。もう」

だけどちよこはもつとぎゅつと僕の体を抱きしめる。く、苦しい

……

「ありがと、ユッキー、ありがとね」

僕に抱きつくちよこの向こうに、一度だけ振り向いたあんの姿が見えた。

12 田舎へ帰ろう

あの土手での事件のあとから、ちよこは僕にべったりになった。

「ねえ、ユツキー！ユツキーはドーナツ好き！？」

6畳間にみんなが集まって、食事をしようとしたところに、ドーナツの箱を抱えたちよこがやってくる。ちよこは僕の体に寄り添うようにして隣に座りこむ。

「え、ドーナツ？」

「新発売のドーナツが出たから買ってきたの！ユツキーはストロベリーとチョコ、どっちが食べたい？」

「チョコ、チョコかな？」

「やーん！あたしのことそんなに食べたいのお？」

おいおい、お前じゃないって。僕が顔を上げると、花子さん、こむぎさんの温かな視線と、あんの冷たい視線が突き刺さった。

「とにかく、ご飯食べてからいただくから」

「あたしが、あーんって口に入れてあげるね」

ただ苦笑いをするしかない僕の前で、あんが言った。

「ちよつと、チョコ！あたしの分は？」

「えー？あん姉の分なんて買ってないよ」

「なんでよ！？なんで幸ばかりひいきすんのよ！？」

「だってユツキーは、あたしの白馬の王子様なんだもん」

お、王子様って……てか、そんな僕を助けてくれた王子様は、このあんなにだけどね。

あんな不機嫌な顔をして、ご飯をかつ食らう。そんな僕たちをとを、花子さんもこむぎさんも、なぜかにこにこしながら眺めている。

ああ、余計この家に居づらくなってしまった僕……

「ユツキー、あたしがご飯食べさせてあげようか？」

「いや、けっこうです……」

誰か、なんとかしてくれよ。この夢見る中2の少女を……

その日、夕方のタムラベーカーリーはとても忙しかった。でも店に来るお客はほとんどが常連さんで、みんな花子さんとこむぎさんが朝から心をこめて作ったパンを、嬉しそうに買っていた。

「このパンが大好きだから、他の店のパンなんて食べられないのよねえ」

いつも買いに来るおばさんがそう言って笑う。そう言ってもらえると、なんだか僕まで嬉しくなる。僕が作ったわけでもないのに。

店がひと段落したら、花子さんが僕に声をかけてきた。

「幸ちゃん、いつも店の手伝いありがとうね。これ、もしよかったらもらってくれる？お給料みたいなもん」

お、お給料？そんなもん出るのか？僕は花子さんが差し出した封筒を見つめて、首を振った。

「そ、そんなのもらえません！僕、居候で迷惑かけてばかりだし……」

「なに言ってるの。誰も迷惑だなんて思っていないよ？」

でも、でも……僕だけそんな特別扱い……

「みんなにあげてるのよ。1ヶ月に1度、お小遣い代わりにね。チヨコにはスカートを買わされたし。お母さんから子供たちへのお小遣いよ」

花子さんがつこり笑って、僕の手の中に封筒を握らせる。

「実はそれ、あんが買ってきたんだけどね。幸ちゃんきつとホームシックにかかっているんじゃないかって」

あんが??僕はそつと封筒を開ける。中には僕が住んでた街までの電車のチケットが入っていた。

「お父さんとお母さんのお墓参りがてら、懐かしいお友達にでも会ってきたら？今度の土日、行ってらっしゃいよ」

「でも……」

「子供のくせに遠慮なんてしないの！ね？」

「あ、ありがとうございます！」
僕は花子さんの前でぺこりとお辞儀をした。

理衣子に会える。理衣子に会える。僕は部屋への階段を駆け上がり、ふとあんの部屋の前で立ち止まった。このチケット、あんが買って来たって言ってたよな……

「あん？」

ふすまを軽くノックする。

「あん？いないの？入るぞ」

「わあっ！」

僕がふすまを開けたのと、あんが叫んだのが同時だった。部屋の中には旅行バッグと、服やらタオルやら地図やら、いろいろなものが散乱していた。

「なに？お前、旅行でも行くの？」

「あんたにはカンケーないでしょ！？」

財布の近くに落ちているチケットを拾う。それは僕の持っているのと、同じ日、同じ時間の電車のチケットだった。

「これ……なんで？」

「うるさいっ！一人旅だよっ、一人旅っ！」

「でも俺と同じ電車じゃん」

「たまたま方向が同じだっただけ！席も車両も違うもん！」

僕は疑いの目であんを見る。

「お前、俺の後つけようとしてるとか？」

「バカっ！カンケーないって言うてるだろっ！出てけよっ！」

あんが僕に旅行バッグを投げつけた。

まったくわけわからん、この女。なんで僕の田舎なんかについてくるんだよ？？

「言っとくけど、俺と彼女の邪魔すんなよ？」

「するかっ！バカっ！」

また何かをぶつけられそうだったから、僕は急いで部屋を出た。

だけどあんはものすごく照れてるみたいに、顔が真っ赤だった。

13 電車の窓から見たもの

土曜日の朝、タムラベーカーリーを出た。同じ電車に乗るくせに、あんは僕と出る時間をずらしているみたいだった。ヘンな女。なにが一人旅だよ？

電車の中で、僕はあの引き裂かれた写真を見つめていた。僕が突然理衣子の前に現れたら、驚くだろうな……だけど本当は……理衣子に会いに行くよって、連絡する勇気がなかったんだ。断られたらどうしようって……結局僕は彼女に手紙も書けなかったし、電話もあれつきりかけてなかった。

電車が大きな駅に着いた。ホームに下りると、案の定、大きな荷物を持ったあんが、きよろきよろ周りを見回していた。あいつ、僕のこと、探してるんだな？

僕はそんなあんの後ろに回り、トンつと背中を叩いた。

「ここから乗換えだよ」

「え、え？なにが？」

あんがすつとんきような声を出している。ここまで来れば僕のほうが地理に詳しい。それだけであんより優位に立てたような気がして、気持ちいい。

「こつち」

僕はあんの手を引いて、ローカル線のホームへ向かった。

東京の駅は、電車に乗るだけで目が回りそうになるけど、やっぱり田舎はのんびりしてて、僕にはこのほうが合っているみたいだ。

客のまばらな電車に乗り換え、ボックス式の席に座る。あんはどこか緊張したような顔をして、僕の前に座った。

「あたしがどこに行くのかわかってるの？」

「わかるよ。俺と一緒に来たいんだろ？」

「誰がそんなこと言ったのよー！」

僕がははつと笑ってあんの顔を見る。あんはむっとした顔で窓の外を見つめる。電車はゆっくりと1本の線路を走り出す。

やがて、電車の揺れに身を任せていたあんが、ぼつりとおつぶやいた。

「あたし、あなたの住んでた家に行ってみたいの」

「え？」

僕があんの横顔を見る。

「あたし小さいとき、あなたの家に遊びに行ったことがあるんだよ？」

僕は昔の記憶を必死に呼び戻す。そういえば小さい頃、東京から来た親戚の女の子と遊んだような気もする。

「覚えてないの？」

「覚えているような、いないような……」

あんが僕を見てふうつとため息をつく。

「じゃあ、うちに遊びに来たことは？」

「それもいまいち……」

「記憶力悪すぎ」

だって何年前の話だよ？

「あんたうちのパン食べて、おいしい、おいしいって言ってたじゃん？」

パン？パン……パン。ああ、そういえば、あのパン食べて懐かしい気がしたのは、昔食べたからなのか？

「あ、なんかこの景色、見たことあるかも」

あんが窓の外を指差す。マジかよ？すごい記憶力だな？お前は窓の外に広がるのは、一面の田んぼと畑。そしてそれが緑の山々につながっている。

なんにもない、なーんにもない、僕が生まれて育った田舎の風景。

「あの遠くに見えるの、俺の通ってた高校だよ」

「え？幸の？どれ？」

「あれだよ」

僕はあるの隣に移動して、同じ目線になって指をさす。ふと気がつくのと、すぐそばにあるの横顔があった。

あんの長い黒髪はシャンプーの香りがした。窓の外をじっと見つめるあんのまつげが、ぱちぱちと瞬きしている。

「どれよ？」

あんが僕に振り向いた。僕とあんの距離はめちゃくちゃ近かった。まるでキスするときみたい……

「幸？」

「え、ああ、だから、あ、もう過ぎちゃった」

僕はなぜだかあせていた。これから理衣子に会うっていうのに。あんの顔を見て、こんなにドキドキしている自分がいたから。

「なんだあ……」

あんはそう言っつて、また窓の外を見た。僕はそんなあんの横顔につぶやく。

「俺たち……昔一緒に遊んだの？」

その声は、電車のがたごとという音にかき消されそうだった。

「……うん。いっぱいいっぱい遊んだよ」

あんは僕に振り向かないまま、そう言った。

14 ふたりの笑顔と彼女の涙

僕たちは小さな駅で降りた。

「んじゃ、俺はちよつと用があるから」

「ええー？こんな何にもないところで、どうすりゃいいのよ！？」

確かに駅前には何にもなかった。ひっそりとしたロータリーと数件の商店。

「お前記憶力いいんだろ？俺のうちでも見学してくれば？今は誰も住んでないはずだけど」

「そこまで覚えてないもん」

「一人旅って言ったよな？地図持ってたじゃん。まあ、がんばれよ」
僕はあんを置いて走り出すと、駅前の公衆電話の受話器を取る。

そして理衣子の家の電話番号を押した。

「悪いわね、理衣子、お友達と遊びに行ってしまったの」

電話に出たのは理衣子のお母さんだった。

「そうですか……」

「理衣子の携帯番号、教えましょうか？」

「い、いえっ！けっこうです！ではっ！」

僕はそう言っただけで電話を切った。バカだ。なにやってんだ、なんで携帯番号聞かないんだよ？

「彼女、いなかった？」

突然目の前にあんが立っただけで驚いた。

「う、うるさいっ！お前、早くどっか行け！」

「だって何も無いし。あーなんかお腹すいちゃった」

「国道まで出ればファミレスあるよ」

「じゃあ、案内して？」

あんがにつこり笑って僕を見る。なんかこの笑顔コワイ……断つたらパンチでも飛んできそうだ。腹が減ったときのあんは機嫌が悪

いからな。

僕たちは仕方なく国道沿いのファミレスへ向かった。

最近できたばかりのこのファミレスは、僕たち高校生のたまり場でもあった。他にこの街の娯楽といえば、隣駅にやっぱり最近できたシヨツピングセンターぐらいか……

僕はあると一緒にファミレスへ入る。

「いらっしやませー」

ウェイトレスが僕たちの前に現れる。

「えっと、ふたりね」

そう答えるあんの背中の方こうに、僕は偶然見てしまった。すぐにくるりと回れ右をして、僕はファミレスを飛び出す。

「あ、ちよっと！幸！どこ行くの！？」

あんが僕の後を追ってくる。僕は店の前の駐車場で、あんに腕をつかまれた。

「なに？なんで急に出て行くのよ！？」

「いや、やっぱりこの店やめよう」

「なんで？」

「……」

「なんでよ！？」

その時、店のドアが開き、ふたりの人影が見えた。あわてて視線をそらそうとしたけど、それより先に、僕の視線は男の視線とぶつかった。

「ゆ、幸？」

「よ、ようっ！俊介」

あんが振り返って僕の視線の先を見つめる。そこには僕の親友だった俊介と 理衣子の姿があった。

「な、なんだよ？お前帰ってきてたなら電話くらいしろよ？」

俊介がそう言いながら僕に近づいてくる。でもその顔はあきらかにひきつっていた。たぶん僕の顔もひきつっていたに違いないけど。

俊介は僕の前に立つと、隣にいるあんのことをちらりと見た。

「あ、こいつは俺の親戚。この人の家に今、お世話になってるんだ」
「ああ、東京のパン屋さんだったけ？」

あんが俊介に向かって小さく会釈する。僕はあんに俊介を紹介する。

「こいつ俺の親友の俊介」

「どうも」

俊介があんに笑いかける。そして後ろを振り向いて言った。

「今さ、偶然理衣子に会ってさ。ちよっとお茶でもしてくか？なんて……な？理衣子」

俊介の声がめちやくちゃ言い訳がましく聞こえる。僕はその時初めて、理衣子の顔を見た。だけど理衣子はうつむいて、ただ黙り込んでたままだ。

「じゃ、じゃあ、俺はここで」

俊介が軽く手を振り歩き出す。僕はそんな俊介の背中につぶやいた。

「付き合ってるの？」

僕の声に俊介の動きが止まる。

「付き合ってるの？お前ら」

あんが僕を見ているのがわかる。僕はどんな顔をしていたらう。怒っていたのか泣いていたのか、自分でもよくわからない。ただ僕の頭の中に、さっき店の中で見た、ふたりの幸せそうな笑顔がぐるぐると回っていた。

「ごめんなさい……幸ちゃん」

その時、理衣子の消えそうな声が聞こえた。

「あたし、寂しかったの……だから……」

もういい。それ以上言うな。なんとなくわかっていたことだから。理衣子の泣き声が僕の耳に響く。僕はそのまま何も言わずに、その場を去った。

15 あんとホテルでふたりきり!?

僕は黙って歩き続けた。ただどんどん、どんどん、歩き続けた。そしてその後を、あんが何も言わずについて来た。

やがて僕はついこの間まで住んでいた家の前にたどりついた。誰も住んでいないその家の門扉には、「売り家」と書かれたプレートがぶら下がっていた。

「殴ってやろうか？」

あんがつぶやく。

「あたしがあのふたり、殴ってやろうか？」

僕は黙って首を振った。気がつくとも涙があふれていて、あわてて服の袖でこすった。

「……俺が悪いんだ」

あんが僕の顔を見つめる。

「理衣子にふられるのが怖くて、連絡もしないですつと逃げた。だから理衣子は悪くない」

「じゃあ、あの親友は？」

「あいつはずつと理衣子のこと好きだったから……」

「だから許すの？」

「あいつだったら……許す……」

「バカじゃないの!？」

あんが荷物をどさつと地面に置いて、座り込んだ。

「バカだよ! あんたも彼女もあの男も! ホントにバカ! バカばっかり!」

あんはそう言うつとひざの上に顔を伏せた。

「あん……?」

あんは何も答えない。

「泣いてんの?」

「なんであたしが泣くのよっ」

「でも……」

あんは顔を伏せたまま、かすかに背中を震わせている。僕はあんの隣に寄り添うように座って、彼女の背中をぼんぼんと叩く。

何気なく空を見上げたら、夕焼け雲が浮かんでいた。僕と手をつなぎながらオレンジ色の空を見て、「キレイだね」って笑った、理衣子の顔を思い出した。

「ホテル予約してないのかよ!？」

薄暗くなつた小さなホームであんに言う。

「だって、駅前にビジネスホテルぐらいあると思つたから」

「ないよ、ここには。大きな駅まで戻らないと。次の電車30分先だけだな」

僕はふうつとため息をついて、ホームのベンチに座った。

「辛こそ、泊まるところあるの?」

うつ、それを聞くな。理衣子に会えればなんとななるって思つた。最悪俊介のところでもよかつたし。でもその計画は全部パーだ。

「……一緒に泊まる?」

「へ?」

あんが僕の隣に座って言う。

「だつて一緒に住んでるんだし。別に同じことじゃん?」

「全然違うだろっ!」

一体なに考えてんだ?このお嬢様は……

僕たちはそれからだばーつと電車を待った。あんは退屈そうに大きなあくびをする。

「なんか眠くなっちゃった……」

「寝るなよ?こんなところで」

「電車来たら起こして」

あんが僕の肩にもたれかかって目を閉じる。彼女の温かな体温が、僕の右肩に伝わってくる。

「幸……」

「なんだよ？」

「幸はこの街に戻りたい？」

僕はぼんやりと光る、ホームの灯りを見つめる。

「いや……早くタムラベーカーリーに帰りたい」

あんが小さく笑った。そして僕の肩に頭を寄せたまま、静かに目を閉じた。

成り行きとはコワイものだ。田舎に帰った僕と、なぜかそれについてきたあん。ふたりは今どういうわけか、ビジネスホテルの同じ部屋にいる。

『シングルふた部屋とるより、ツインをひと部屋とったほうが安上がりだってば』

『同じ家に住んでるんだから、別にいいじゃん』

『知らない街の知らないホテルに、女の子一人で泊まらせるつもり？』

あんがわけのわからない理由を並べ立てるから、僕たちは一緒に部屋に寝る羽目になった。

「だけどあたしに指一本触れたら許さないからね！」

だったら別の部屋にしろよ。だいたい一人旅はどうなったんだよ？

「あー気持ちよかった！幸もお風呂入ってきなよ」

あんがホテルの浴衣を着て、風呂から出てきた。う、なんか色っぽい。風呂上りのあんなんで、見慣れてるはずなのに。

「じゃ、じゃあ、俺も入ってくるかなー」

僕は逃げるようにして風呂に駆け込んだ。

この部屋にあんとふたりきり。ふたりきり……いやいや、理衣子にふられたからって、すぐにあんに乗り換えるなんて……そんなのサイテーだろ？……だけど……だけど一人の男として、この状況をなんにもしないで、朝まで乗り越えられるのか？？

悶々とした気持ちのまま風呂から出る。恐る恐る部屋をのぞくと、あんはベッドの上で体を丸めて横になっていた。

「あん？」

あんはぐっすり眠っているみたいだった。僕が声をかけても全然気づかない。僕はそんなあんに、そっと布団をかけてやった。

「ん……ゆき……」

反射的にぱつと離れる。前につい魔がさしてあんにキスしようとした時、顔を殴られて「殺すぞ」と言われた、恐ろしい記憶がよみがえったからだ。

「ただどあんは寝ぼけているだけのようだった。」

「あん？寝てるの？」

僕はゆっくりあんに近づき、その顔をのぞきこんだ。あんの寝顔は幸せそうに見えた。幸せそうで、なんだかわいかった。するとあんは寝返りをうちながら、消えそうな声でこうつぶやいた。

「ゆき……だいすき……」

16 約束

小さな町に広がる、一面の田んぼと畑。それを見下ろす土手に座って、嬉しそうに笑っているのは、幼い頃のおん。おんはたんぽぽで首飾りを作ると、自分ではなく、僕の首にかけてくれた。

「幸ちゃん、似合うよ」

「そ、そう？」

僕の前でおんが笑う。たんぽぽをつまんで苦笑いする僕……

僕たちは夕暮れになるまで土手で遊んだ。

「幸ちゃん、おんちゃん！もう帰ってきなさい」

母さんが僕たちを呼んでいる。帰ろうとする僕の手をひっぱって、まだ帰りたくないってだだをこねるおん。

「また明日遊ぼうよ」

「明日は帰るんだからダメだもん」

「じゃあまた遊びに来れば？」

「あたしのうち遠いの。今度いつ来れるかわかんないもん」

そんなこと言っただって……母さんがまた僕たちを呼んだ。するとおんが独り言のようにつぶやいた。

「でもおんと約束してくれたら、帰ってもいいかな？」

「約束？」

おんが僕を見て、いたずらっぽく笑う。

「おんと結婚するって、約束してくれたらいいよ？」

「けっこん？」

「いい？」

早く家に帰りたいかった僕はおんの前でうなずいた。

「じゃあ決まり！幸ちゃんはおんと結婚するんだよ！」

「うん」

おんが夕焼け空の下で嬉しそうに笑う。けっこん……そうか、僕はおんと結婚するのか……

「結婚!？」

僕は驚いて目を開ける。ああ、夢か……助かった……

窓から差し込むかすかな光。ん?ここはどこだっけ?そういえば、確か昨日あんと一緒にホテルに泊まって……

なんとなく腹のあたりが重くて見てみると、はだけた浴衣から伸びた白い足が、僕の上に乗っている。

ぼんやりとした頭のまま、僕は目の前に見えるあんの顔を見つめた。するとその目がぱちつと開き、僕の顔をじつと見た。

「幸?なんで?」

さあ?なんでだろ?なんで僕はあんと向かい合って寝ているんだ?

「どけっ!スケベ!」

「いてっ!」

僕はあんに腹を蹴られて、ベッドの下に叩き落された。

ホテルを出て、駅前のコーヒーショップに寄った。あんは朝からずっと口を利いてくれない。

「あ、あのさ、あん?言つとくけど、俺、あんに指一本触れてないから」

あんが恐ろしい顔で僕をにらむ。

「なんであんのベッドで寝ちゃったのかは、よく覚えてないんだけど……」

「覚えてないのに、なんで指一本触れてないって言えるのよ?」

「そ、それは……でもほんとに何もしてないからっ」

あんがカップをトレイに置いて立ち上がる。

「このコーヒー代、あんたが払いなよ!」

「……はい」

殴られなかっただけ、ましかもしれない……

17 最後の嘘

僕たちは電車に乗ってまたあの街まで戻り、僕の両親の墓参りに行った。あんはお墓の前で手を合わせ、ずつとずつと目を閉じていた。

「あんは……俺の両親のこと、覚えてるの？」

僕があんの背中につぶやく。やがてあんはゆっくりと立ち上がり、遠くを見つめながら答えた。

「少しだけ……すごく優しくしてもらった覚えがある」

「そっか……」

するとあんは振り返って僕のことを見た。

「幸のお父さんとお母さんって、どんな人だった？」

「うちの父さんと母さん？」

僕はしばらく考えてから答える。

「父さんは……仕事人間だった。だけど休みの日は必ず、俺と一緒に遊んでくれた。遊園地や動物園に連れて行ってくれたり……きつと疲れていたはずなのに」

あんは黙って僕を見ていた。僕はなんだか照れくさくなって顔を背ける。

「母さんは……優しくかった。料理が上手でいつもおいしい弁当や夕食を作ってくれた。でもあの頃の俺はそれが当たり前だと思っていたから……」

僕は鼻水をすすった。泣いてるわけじゃないぞ？これ以上、あんの前で泣くななんて、かっこ悪すぎだ。

「今頃『ありがとう』なんて言っても遅いよな……」

「幸……」

突然僕の手が温かいものに包まれた。気がつくともあんが僕の手をぎゅっと握りしめていた。

「遅くなんてないよ？」

僕は黙ってあんを見る。あんは僕に向かって静かに微笑む。

「そう……かな？」

「そつだよ」

僕はあんと手をつないだまま、父さんと母さんが眠る墓石を見つめた。だけどやっぱり『ありがとう』なんて恥ずかしくて声に出せないから、こっそり心の中でつぶやいてみた。

『父さん、母さん、今まで僕を育ててくれてありがとう』

僕とあんは、また駅に向かって並んで歩いた。僕の生まれて育ったこの町を、昔ふたりで一緒に遊んだっというこの町を……そうしたらあんとは、ずっと昔から一緒にいるような気がして、なんだか不思議な気持ちになった。

「あん、あのさ……」

僕が言いかけたとき、駅の改札に見慣れた人影を見つけた。

「り、理衣子？」

あんも僕と一緒に彼女を見る。理衣子は僕たちに気づいて、少しうつむいた。

「じゃあ、あたしは先に行ってるから」

あんが僕の肩をポンツと叩いて改札を抜けてゆく。僕はゆっくりと理衣子に近寄る。

「ごめんなさい……ここで待ってれば、幸ちゃんに会えるような気がして……」

理衣子、僕のことを待ってたのか？

「幸ちゃん……あたし……」

「もういいよ。理衣子は悪くない。電話も手紙も出さなかった、俺が悪いんだ」

理衣子が真っ赤な目をして僕を見上げる。彼女の目からは、今にも涙があふれ出しそつだ。

「俊介とは……いつから付き合ってたの？」

「……少し前」

理衣子がふうつと息を吐く。

「最初は幸ちゃんのこと相談してて……それがいつの間にか……」
「好きになっちゃったの？」

理衣子が困ったようにうつむいた。僕はそんな理衣子に言う。

「いいよ。俺も東京で、新しい彼女できたから」

「……え？」

「ごめんな……理衣子」

僕はそう言って、理衣子から視線をはずす。

「俊介は、いいヤツだから……だから……」

その後は言葉にならなかった。僕は理衣子に背中を向けて歩き出す。

「幸ちゃん！」

理衣子の涙声が背中に聞こえる。僕は振り向かないで改札を抜ける。

泣くなよ、理衣子。お前は悪くない。全部悪いのは僕だから。だから僕のことをうんと恨めばいい。そして、俊介と仲良くやればいい。俊介はずっと理衣子のこと、好きだったから……

「新しい彼女って誰よ？」

柱の影にあんが立っていた。

「お前つ……立ち聞きしてたな!？」

「あの子をかばって、自分を悪者にしたわけ? カッコつけてんじゃないよ、バーカ!」

「こ、こいつ……言いたい放題言いやがって……」

「たぶん彼女はわかってるよ。あんたが嘘ついでること」

あんはそうつぶやくと、僕を置いてスタスタと歩きだした。

「ちょ、ちょっと待てよ! あん!」

「早くしな! 電車来るよ!」

僕はあんに置いていかれないように、必死に後を追っていた。

18 恨んでる男からの花束

夕方のタムラベーカリーで店番をする。店内にただよう、パンの甘くて優しい香り。僕の体にはもう、この香りが染み付いている。

「幸ちゃん、田舎であんと一緒に泊まってくれたんだってね？」

「え？ああ、まあ、成り行きで……」

パンを並べながら、こむぎさんが僕に笑いかける。ていうか、僕とあんが一緒に旅行したことは、この家では最初から公認だったよ
うで……まったくどういふ家なんだか、わけがわからん。

「あんって、ああ見えても寂しがりやなのよ。一人でホテルに泊まるなんて、ぜーったい無理だって、私たちみんな思ってたわ」

そ、そうなんですか……だからって僕と泊まっても、いいわけないと思うけど？

「幸ちゃんは迷惑だったかもしれないけど……」

「そ、そんなことないですよ」

と、一応言っておこう。

「でもあんは、幸ちゃんのこと好きだから、許してやってね？」

「はい」

……って、今なんて言った！？あんが僕のことを好き！？

「ちょ、ちょっと待ってください！あんが僕のこと……す、好きって……」

その時、店のドアが開き、お客さんが入ってきた。

「いらっしやいませー」

こむぎさんが笑顔で店先に出る。だけど僕は呆然と立ち尽くしていた。

あんが僕を好き……あのホテルのベッドで聞いた、あんの寝言が耳によみがえる。

『ゆき……だいすき……』

僕の心臓が激しく動いているのがわかった。

もうすぐ夏休みが始まる。4月に僕がこの学校に転校してきて、3ヶ月がすぎた。この頃には、田舎者の僕にも、友達らしきものができていた。

「とがっちゃんてさ、田村と一緒に暮らしてるんだろ？」

僕と弁当を食べながら、同じクラスの中丸が言う。僕の前の席の中丸は、人懐っこい性格だけど噂好き。あんと一緒に住んでいる僕のこと、気になってしかたないらしい。しかもご丁寧に『とがっちゃん』なんて素敵なあだ名までつけてくれて……

「そうだけど？」

「それって恨まれない？」

「恨まれる？なんで？」

「田村って意外とモテるだろ？背高くてスタイルいいし、顔だって美人系だしさー。お前のこと恨んでる男、絶対いるって」

あんがモテる？確かにあんは背が高いし、スタイルもいいっていいばいいかもしれない。顔も……普通にしていれば美人といえるかも。「へえー」

僕は他人事みたいにそう言った。だってたとえ恨まれても、僕はあの家に住み続けるしかないのだから……

そしてその日の帰り、僕はその『恨んでる男』に出会ってしまった。

自転車をキコキコこぎながら土手の道を走っていると、どこかで聞いた声に呼び止められた。

「おい！お前！」

ああ、この声は……あんの幼なじみの大樹……

とにかくかかわりたくない僕は、土手の脇に突っ立っているこいつを、スルーして走り去ろうとした。

「ちょっと待て！パン屋の居候！」

はあー……その呼び方、やめてくれないかな？僕は仕方なく自転

車を止めて、大樹を見る。

「なんか用？花屋の息子さん」

大樹は一瞬むっとした顔をしたが、すぐに照れたような表情に変わり、僕の前に寄って来た。

「これを……」

大樹が背中に隠し持っていた花束を、僕の前に差し出した。げっ

……僕、男には興味ないんですけど……

「これを、あんに渡してくれ！」

「はあ？」

大樹が無理やり僕の胸に花束を押し付ける。

「自分で渡したらいいだろ？」

「わかってる。俺も、お前なんか頼むのはむかつくんだが……」

だったら自分で渡せよ。僕は花束を大樹に押し返す。しかし大樹はもっと強い力で、それを押し戻した。

「恥ずかしいんだよっ！自分で渡すのは！」

大男の大樹が、顔を赤くしてそう言った。

「とにかくあんに渡してくれっ！頼んだぞ！」

大樹が背中を向けて走り去る。色とりどりの花束の中には、『ハッピーバースデーあん』と書いたカードが添えてあった。

19 絶対許さない！

そうか、もしかして今日はあんの誕生日なのか……僕は仕方なく花束を抱えながらパン屋へ向かう。いつものように店をのぞいたら、店番をしているちよこが手を振りながら出てきた。

「キヤー、綺麗！それちよこにくれるの！？」

「違うよ。あんは？帰ってる？」

「……あん姉にあげるの？」

「まあ、いろいろ事情があつてね」

ちよこはぶうつとふくれた顔を見ると、すたすたと店の中へ入ってしまった。あれ、もしかして誤解された？ま、いいか。僕は花束を抱えたまま店の裏へ回る。するとちよこ家から出てきたあんとばったり出会った。

「あ、あん」

「なにそれ？」

「あんがいつものようにぶっきらぼつに言う。」

「これ、あんに」

僕があんの胸に花束を渡す。するとあんの表情が、みるみるうちに柔らかくなつていった。あれ、こんな女でも、花とかもらうと嬉しいのかな？

「それ、花屋の……」

「幸……」

「え？」

「嬉しいっ！ありがとっ！」

あんが僕の前で幸せそうに微笑んだ。いや、あの、僕からじゃないんですけど……だけど、今のあんは素直でかわいかった。嬉しそうに花束をのぞきこみ、花の香りをかいでいる。

「綺麗……あたし花って大好き」

「そ、そうなの？」

「嬉しい、ほんとに。幸、ありがとね」

「やばい。なんだか真実を告げる機会を失ってしまった。」

「これ、部屋に飾らせてもらうね！サンキュ！」

「あんがそう言っつて、上機嫌で家へ上がっていく。どうしよう……
やばいな。でもあんって女つばいところもあるんだな。意外だ……」

「まあ、綺麗。どうしたの？このお花」

「夕食の食卓にやってきた花子さんが言う。」

「あんがね、幸ちゃんにもらったんだって」

「ここにこしながら報告するこむぎさん。皿を並べているあんもど
こか上機嫌。ただちよこだけがむすつとした顔をしている。」

「あらあら、そういえば、今日のはあんの誕生日だったわね」

「そうなのよー、私もすっかり忘れてて……ごめんね、あん」

「いいの、いいの、そんなの」

「やっぱりあんはご機嫌だ。いまさら、この花は僕からじゃないで
すなんて言ったら……殴られるどころか、殺されるかもしれない……」

「でもユツキー、よくあん姉の誕生日、わかったね？」

「え？ああ、まあ……」

「もしかして、あん姉のこと、好きだったりして」

「ちよこの言葉に、部屋中の視線が僕に集まる。な、なんだ？やめ
てくれ。そんな、答えを求めるような視線は……」

「バカ！なに言っつてんの、チヨコは！」

「でもさ、あん姉はユツキーのこと好きじゃん？」

「どきつ……なに言い出すんだよ！？チヨコ……」

「ねえ、母さん。あの話、ユツキーにしてあげたの？」

「ああ、あの話？」

「ちよつと！やめてっつてば！」

「幸ちゃんにも前に聞かれたんだよね？なんでうちに幸ちゃんを引
き取ったのかって話」

ああ、そういえば……あの答え、まだ聞いてなかったよな……

「あれはね。あんがどうしても幸ちゃんをうちに引き取りたいって言ったから……」

「母さん！それ以上言ったら怒るよ！」

「うふふ、いいじゃない。あんは小さい頃から、幸ちゃんのこと、大好きだったもんねえ」

あんの顔が真っ赤になった。たぶん僕の顔も赤くなった。花子さんとこむぎさんが微笑んでいる。ちよこもあんを冷やかすようにニヤニヤしている。

「で、どうなのよ？ユツキー、花なんかプレゼントしちゃってさ。あん姉のこと、好きなんじゃないのお？」

僕はある顔を見た。ガラにもなくうつむいているあん。僕はそんなあんに向かってつぶやいた。

「ごめん……その花……俺からじゃないんだ……」

「え？」

花子さんとこむぎさんとちよこが、一斉に僕を見る。

「これは大樹から、あんに渡してくれて頼まれただけで……」

「なんだ……じゃあこれ、大樹からのプレゼントだったわけ？」

ちよこがあきれたように笑い出す。

「あら、そうだったの」

「やだ、幸ちゃん、それを早く言ってくれなきゃ」

「ごめ……」

僕はそう言いかけて、はっとした。目の前に真っ赤な顔で僕のことをにらみつけている、あんの顔があった。

「あんた、あたしを騙したのね？」

「ちが……そんなつもりじゃ……」

「許さない」

あんの強烈なパンチは、僕の腹に食い込んだ。

「うっ……」

うずくまりかけた僕の胸元を、あんが力いっぱいつかみ上げる。

「絶対許さないから！」

僕の目の前にあんの顔が見えた。あんは涙を流していた。

「あん！やめなさい！」

しかし次の瞬間、僕はあんの鉄拳を顔面にくらって、おいしそうな料理が並んだ食卓の上に見事に倒れこんだ。

窓から蒸し暑い風が吹き込んでくる。布団の上に仰向けになった僕の顔に、ちよこが心配そうに、冷たいタオルを乗せてくれた。

「だいじょうぶ？ユツキー」

今まであんの暴力は何度かくらったけど、鼻血が出るほどマジで顔をぶん殴られたのは初めてだ。それだけ今日のはあんは怒りがマックスだったんだろう。

「あん姉もひどいよね？ユツキーの顔が變形しちゃったらどうしてくれるのよ」

「しょうがないよ……俺が悪いんだから」

ちよこがふうつとため息をつき、そして僕に言った。

「ねえ、ユツキー。あたしにだけ教えて？」

「何を？」

「ユツキーは、あん姉のこと、好き？」

僕はタオルの下で目を閉じた。すると、さっき僕のことを見つめていた、あんの泣き顔が浮かんできた。

20 お前のこと、好きだから

翌朝、僕が台所に顔を出すと、あんがパンを食べていた。

「お、おはよう。あん」

しかしあんは僕を無視して、鞆を手にすると、制服のスカートをひるがえして玄関へ向かった。

「あん！待てよっ」

あんがガラスと玄関を開ける。僕はそれをさえぎるように駆け寄る。すると庭先にあの大樹が立っていた。

「大樹、お待たせ」

「おう」

大樹が僕のことをちらりと見る。なんで？なんでこいつがここにいるんだ？するとあんが冷たい声で僕に言った。

「ちよつとどいてよ」

「な、なんであいつが……」

「あたしが誰と学校行こうと、あんたにはカンケーないでしょ？」

あんが僕を押しつけ、自転車に乗って走り出す。大樹はもう一度僕のことを見たあと、何も言わずにあんと一緒に走り去った。

「とがっちゃん、だいぶ顔、よくなってきたんじゃね？」

むすつとしながら帰り支度をしている僕に、中丸が笑いながら声をかける。あの日あんに殴られた僕の顔は、しばらくの間、試合に負けたボクサーのように腫れ上がっていた。

「そっいえばさ」

中丸が僕の机に腰掛けて言う。

「田村って、最近よく大樹と一緒にいるけど、あれ、どういこと？」

「どういこともなにも……こっちが聞きたいよ。」

「まさか、付き合ってるの？」

「知らねえよ」

「お前ら一緒に住んでるんだろ？」

僕はすでにあんのいない、隣の席を見る。あんはあの日から、一言も話をしてくれない。それどころか、僕の顔を見ようともしない。そのくせ、あの大樹とは毎日いちゃいちゃしゃがって……これって僕に対するあてつけじゃないのか？

「ほら、あれ」

中丸が、窓の外を見ながら僕の腕をつつく。あんと大樹が自転車を押しながら、並んで帰る姿が見える。

あんは笑っていた。大樹の隣で笑っていた。僕はなんだかめちやくちや腹が立ってきた。

「あんのやるう……」

「とがつちゃん？」

僕はガタンつと立ち上がった。中丸が不思議そうな顔で僕を見上げる。

「俺、帰るつ。じゃあな！」

ムカムカした気持ちのまま教室を飛び出すと、自転車に乗りペダルを思いつきり踏み込んだ。

土手まで全力で自転車をこいたら、目の前に自転車に乗ったふたりの姿が見えた。あんと大樹だ。

「あん！待てよ！」

僕の声に、あんが自転車を止めて振り返る。その隣の大樹も、止まって僕を見た。

「なによ？」

息を切らしている僕を、あんがにらみつけるように言う。

「俺、何度も謝っただろ？いい加減、無視するのやめてくれないかな？それに、こういうあてつけみたいなこともやめてくれよな！？」

「あてつけってなによ？」

「だから！俺の前で……他の男といちゃいちゃするようなこと！」

あんが怒った顔で僕を見る。するとずっと黙っていた大樹が口を開く。

「おい、パン屋の居候！」

「そ、その呼び方やめろっ！」

「お前には頼みを聞いてもらって感謝してるよ。だが、俺たちが何しようよと、お前には関係ないだろ？」

「関係ないから、こうやって追いかけてきたんだろ！？それに俺たちが何しようよと」だと？何かしてるのかよっ、お前ら！あー、こいつらなんかむかつくっ！」

「大樹はね」

あんが言った。

「誰かさんみたいに嘘ついたりしないのよ」

「だからあれは……嘘ついたわけじゃなくて……」

「言い訳する男ってサイテー」

あんが僕に背中を向けて自転車を押す。

「こんなやつほっといて、行こっ、大樹」

そう言っただけで歩き出すあん。大樹がそんなあんの隣に並ぶ。

「行くな、行くな。僕以外の男と一緒に行くな！」

「あん！行くな！」

あんの動きがふと止まる。

「行くなよっ！」

次の瞬間、僕があんに向かって叫んでいた。

「俺、お前のこと、好きだからっ！」

21 痛い仲直り

時間が……止まったような気がした。大樹が振り向いて僕を見る。そしてそれより少し遅れて、いや、僕にとつては何分、何時間も遅れたような気がしたけど……やっとあんが振り返って、僕の前につかつかと歩み寄ってきた。

「いい加減なこと言わないでよ」

「いい加減なことなんて言っていない」

「じゃああたしのどこが好きなの？」

「お、男らしいところ？」

あんの平手が僕の頬に飛んだ。

「あたしは男じゃない！」

背中を向けようとしたあんの腕を、僕がぎゅっとつかむ。

「行くなよ」

あんが僕の顔を見る。そしてもう一度僕の頬を殴る。

「離してよっ！」

「イヤだ。離さない」

あんの平手打ちが再び飛んでくる。

「離して！」

「イヤだ！大樹なんかに渡さない！」

「あん！何やってんだ！こっち来い！」

大樹の声が聞こえてくる。僕はじつとあんを見つめる。すると、あんの瞳から何かがこぼれて、へなへなとその場にうずくまった。

「ごめん……大樹。先に帰って……」

大樹が黙って僕たちを見ている。あんは僕に腕をつかまれたまま、うつむいている。

「……わかったよ」

大樹はそうつぶやくと、僕たちの前から去っていった。

僕はあんの前にしゃがみこんだ。あんは顔をひざに押し当て背中を震わせている。

「あん……」

土手の上に風が吹いて、あんの長い髪がかすかに揺れる。僕はあんの腕から手を離し、その髪にそっと触れた。

柔らかい髪。初めて触れたあんの髪。うつむくあんの頬にかかっている髪が、少し濡れている。

あんは泣いていた。僕の前で泣いていた。

「あん……ごめん……」

僕はまた謝っていた。

「ごめん……泣くなよ？」

するとあんが涙声で僕につぶやく。

「もう一度言って？」

「え？」

「もう一度、好きって言って？」

あんが顔を上げて、潤んだ瞳で僕を見つめる。僕はそんなあんに向かって言う。

「好き……だよ」

ずっと仏頂面だったあんが、恥ずかしそうに、でも嬉しそうに微笑んだ。そしていきなり立ち上がると、空を見上げて大声で叫んだ。

「許してあげる！」

「え……」

「あんたのこと、許してあげる！」

あんがふふつと笑って僕を見下ろす。いつものあのえらそうな態度で……そして倒れている自転車を立てると、夕焼け空の下をすたすたと歩き出した。

「ま、待てよ！あん！」

僕もあわてて自転車を起こして、あんの後を追いかける。

ああ、僕はなんであんなことを言ってしまったんだろう？治りかけた頬がひりひりと痛む。あんなに暴力をふるっておいで『許して

あげる』とは、お前何様だ？

あんは後ろを振り返ると、涙を夕日に輝かせながら、僕に向かって小さく笑った。

22 キスしてくれたら忘れてあげる

やがて夏休みが始まった。あんとちよこと僕は、順番に店を手伝うことになっていた。だけどちよこは部活が忙しそうだったし、あんなは家事がまるでだめな僕の代わりに、家のことを全部引き受けてくれたので、店はほとんど僕が手伝っていた。

「ごめんねえ。いつも幸ちゃんにばかり手伝わせちゃって」

「いえ、僕、どうせ暇ですから」

「こむぎ、あんたは大丈夫なの？」

焼きたてのパンを運びながら、花子さんが言う。

「紺野さんとデート、してきてもいいのよ？」

「なに言ってるのよ、母さん。お店があるのに遊んでられないわ」

「大丈夫よ。幸ちゃんがいるから。ねえ、幸ちゃん！」

「あ、は、はいっ」

こむぎさん、彼氏いるんだ。でもこむぎさんはどこか浮かない顔をしていた。彼氏とうまくいってないのかな？なんて、勝手な推測をする僕。

しかしこむぎさんって綺麗だし、優しいし、笑顔がサイコーに素敵だし、絶対モテると思うんだよね……誰かさんみたいに暴力なんて絶対ふるわないし。

「なあに？幸ちゃん」

はっ！いつの間にか、僕はこむぎさんに見とれてしまっていた。

「い、いえ、なんでも……それよりホントにお店のことは僕に任せてください！なんて、言えるほど、頼りにならないと思うけど」

こむぎさんがくすくすと笑った。

「そうね、それじゃあ、今度お願いするわ。ありがとね、幸ちゃん」

こむぎさんの顔が少し明るくなった。よかった。

その日はすごく忙しい日だった。夕方になってちよこが帰って来

たから、朝から働いている花子さんとこむぎさんが休憩をとることになった。店番をするのは僕とちよこ。ちよこはさっそく僕の耳元に話しかけてきた。

「最近あん姉、ご機嫌だと思わない？」

「そ、そうかな？」

ちよこが僕の顔を意味ありげにのぞきこむ。

「もしかしてユツキーとあん姉、できちゃった？」

で、できちゃったって……ちよこはさらに僕に詰め寄ってくる。

「あん姉に好きだって言ったの？」

僕はちよこに弱みを握られている。前にちよこから『あん姉のこ」と好き？』って聞かれたときに、つい、ほんとにっただけど、『好き、かも』って言ってしまったのだ。

「ねえ、言ったの？」

「い、言った……」

「うわ！言ったんだあ！じゃあ、チューぐらいした？」

「し、してねーよっ！」

「なーんだ。キスぐらい、中学生だっしてしてるよ？」

ちよこが僕の顔を見てくすつと笑う。完全にバカにされてる。なんで僕は中2の女の子を相手に、こんなにするたえなければならぬのだ？

「でも、残念。ユツキーはあたしのものだと思ってたのに……けど、あん姉のほうが先に、ユツキーに目えつけてたから仕方ないか……」
ちよこが両手を頭に乘せて、くるりと後ろを振り向く。あんな……人のこと『あたしのもの』とか『目えつけてた』とか言うなよな……
「ただどちよこはそれつきり黙りこんでしまった。」

「チヨコちゃん？」

背中を向けたちよこがうつむいている。

「あ、あのさ……あの……」

するとちよこが振り向いて僕を見た。

「ユツキー、あたしに悪いと思ってるの？」

「いや、それは、その、まあ、そうだな……」

「じゃあ、ユッキー。あたしの最後のわがまま、聞いてくれる？」
「なんか、嫌な予感。」

「あたしとキスして？」

「へ？」

「キスしてくれたら、ユッキーのこと忘れてあげる」

「ちよこが僕の首に両手を回してくる。」

「ちよ、ちよっと待って！ここ店だってば！」

「平気だよお、今、お客さんいないんだし」

「ちよこの顔が異常に近い。おいおい、僕はあんのことが好きだつて、言っただろ？なんでこうなるんだよ？するとちよこがいたずらっぽい顔をして僕にささやいた。」

「あたしって遊んでるように見えると思うけど、実はキスしたことないんだ。周りの友達みんなしてるのに」

「じゃあ、よけいにダメだろっ！そういうものは好きな人とするもんで……」

「だから、ユッキーとしたいの」

「なんだかんだ言いながら、ちよこの顔が近づいてくる。」

「一番好きなユッキーとしたいの」

僕の唇にちよこの唇が触れそうになる。その時、店のドアがバタンと開いた。

「あ……」

「ちよこが僕から離れて店の入り口を見る。僕もそれに続いて同じ方向を見る。」

そこには僕たちのことを黙って見つめている、あんの姿があった。

「気まずい、気まずい、気まずい……夜の食卓は、またもや気まずい雰囲気に戻ってしまった。」

「あんはむっとした顔でご飯を食べている。ちよこはそんなあんの顔をちらちらとうかがっている。」

さつき、あんに殴られるんじゃないかと思ったけど、あんは何もしないし、何も言わなかった。その代わり、無言の怒りのようなものがひしひしと伝わってくる。

どうしよう。謝るしかないよな……ちよこに無理やりキスされそうになったなんて言っても、『言い訳する男はサイテー』と言われるだけだろうし……

結局おいしいはずの夕食も、全然食べた気がしなかった。

23 この家が嫌いなのか？

「あん？」

食事が済むと、さっさと自分の部屋へ行ってしまったあんを追いかけるようにして、僕も2階へ上がった。

「は、入ってもいい？」

返事がない。

「入るぞ？」

ふすまをガラツと開ける。するとベッドの上に座ったあんが、怖い目をして僕をにらみつけていた。

「あん、ごめん！」

とりあえず僕は頭を下げた。怒鳴るなり、殴るなり、どうにでもしてくれ！だけどあんは、やけに落ち着いた声でつぶやいた。

「なんで謝るの？」

「え？」

「あんたあたしに謝るようなことしたの？」

「えっと、それは……」

「どうせチヨコに無理やりあんなことされたんでしょ？わかってるんだから」

そしてすくつと立ち上がると、僕の前にやってきた。あんの視線と僕の視線がちょうどぶつかる。

「今日、進路相談で学校に行ったら、先生が言ってた。あんた勝手に就職って決めたでしょ？しかも住み込みで働ける場所探してるのか」

「な、なんだ、そんなことか……」

僕とちよこがキスしそうになったこと、怒ってたわけじゃないんだ……

「そんなことじゃないよっ！なんで就職なのよ？あんたの成績だったら、余裕で大学行けるのに……」

「べつにいいだろ？働きたいんだから」

「それ、母さんに相談したの？」

「してないけど……もう決めたことだから」

あんが僕の前にずいっと詰め寄る。

「きつと母さんシヨツク受けると思うよ？」

「就職するのがそんなに悪いことかよ？」

「違う！あんたが誰にも相談しないで勝手に決めたこと！」

あんの声が部屋中に響く。その時ガラツとふすまが開いた。

「あん！あんた何大声出してるの！？また幸ちゃんに暴力ふるって
るんじゃないでしょうね！？」

部屋に入ってきたのは花子さんだった。

「暴力なんてふるってないよ」

「あん、あんたね。うちには男がいなかったからわからないと思う
けど、男の人の力はあるんだからね！？幸ちゃんだ
って本気出したら、あんたなんか到底かなわないだよ！？」

は、花子さん……それはどうかなあ？

「幸ちゃんは優しいから、あんたに手を上げないだけ。わかってる
の！？」

「わかってる」

あんが素直にそう言った。でも僕が本気出しても、あんにはかな
わないような気がするけど……まあ、そういうことにしておくか。

「それより母さん。幸の進路希望、何て出したか知ってるの？」

「え？」

「幸、就職したいんだってさ」

「就職？」

「しかもこの家出るって」

花子さんが僕を見た。

「母さんだつて知ってるでしょ？幸の前いた学校、有名な進学校で
さ。こいつ見かけによらず、すつこく頭よくて……」

「あん！うるさいな。俺はもう決めたんだよっ！」

しかも『見かけによらず』ってなんだよ？こいついちいちムカつくやつだな。

「幸ちゃん。うちのことは心配しないでいいんだよ？幸ちゃんはずっとこの家で、幸ちゃんの好きなことをして欲しいの」

そんなこと言われたって……花子さんやその娘たちが、おじさんの残したパン屋を守るために必死で働いているこの家で、居候の僕がのほほんと大学なんて通ってられないだろ？

すると僕に向かってあんが言った。

「幸。あんたそんなにこの家が嫌いなもの？」

「嫌いなんて言つてない」

むしろ好き。大好き。だからこそ僕は、この家にこれ以上迷惑かけたくないんだ。

「じゃあなんで出て行くなんて言うのよ！ここに住んでいいって言うてるんだから、住めばいいじゃない！？」

「あんにはわかんないんだよ。俺の気持ちなんか」

「わかんないよ！全然わかんない！」

あんが両手で僕の胸を叩いた。

「バカっ！幸のバカっ！」

あんはうつむいて、握ったこぶしで何度も僕の胸を叩いた。そしてそのまま頭を僕の胸にくっつけてきた。

「嫌い……幸なんか……大嫌い」

「あん……」

あんは泣いてるみたいだった。やがて僕から離れると、あんは黙って部屋を出て行った。僕は突っ立ったまま、あんの背中を見送る。

「幸ちゃん」

そんな僕に花子さんが言う。

「私たちは幸ちゃんのこと、本当の家族だと思ってるの。だから出て行くなんて言われたら、私も、あんも、悲しいのよ」

僕は静かに目を閉じる。この家に来てからずっと、あんは僕のことを気にかけてくれていた。そんなあんを裏切つてまで、出て行くこ

うとしている僕。僕は正直、自分の気持ちがいなくなっていた。

24 こむぎさんの恋人

この家の人たちはみんないい人だ。花子さんは僕のことを本当の息子のように思ってくれてるし、こむぎさんはいつも天使のように優しい。ちよこは妹みたいに可愛くて、あんなは……あいつのことは置いといて……とにかくこの家の人たちは、焼きたてのパンのようにふわふわと温かいんだ。

部屋でぼーっとしていた僕の背中に声が聞こえた。

「ユツキー？入っていい？」

「いいよ」

ふすまが開いてちよこが顔を出す。

「この前はごめんね？あんな姉、ユツキーのこと怒ってなかった？」

「大丈夫だよ」

「よかったあ……」

「チヨコは？」

ちよこがペロツと舌を出して僕に言う。

「あんな姉の代わりに1週間、夕食の支度しろだって。あたしが無理やりユツキーにキスをせがんだの、ちゃんとわかってたみたい」

僕はそんなちよこに言う。

「でも、はつきり断らなかつた俺も悪いだろ？夕食の支度、半分俺が……」

「けっこう！ユツキーの作った食事なんて、人間の食べるものではないじゃん？」

おいおい、そこまで言うか？けどちよこはくすつと笑って僕を見る。

「でも、ありがとう。だからユツキー好きだよ」

「あんなさ、チヨコちゃん」

開いた窓から蒸し暑い風が吹き込んで、古ぼけた風鈴がちりんと鳴った。

「チヨコちゃんはまだ中2だろ？これから俺なんかよりもっと好きな人見つかるって。だから初めてのキスはその時のために……」
「わかってる」

ちよこが立ち上がって、にっこり微笑んだ。

「あたしのファーストキスは、その人のためにとっておく」
うん、それがいいよ。

「じゃ、おやすみ。ユッキー」
「おやすみ」

ちよこが手を振って僕の部屋から出て行く。僕はぼんやりと、そんなちよこの背中を見送る。ちよこの背中はどことなく寂しげな感じがした。

夏の日差しがまぶしい。ちよこに夕食の買い物を頼まれた僕は、商店街に出かけた。そしてその帰り、店の裏で僕は見てしまった。

こむぎさんと見知らぬ男。ああ、もしかしたら、この前言った彼氏かもしれない。だけど……だけど、こむぎさんは、その男の前で泣いていた。あの、いつも笑顔を絶やさないこむぎさんが……

僕は見て見ぬふりをして通り過ぎようとしたけど、あそこを通らなければ家に入れないし。おたおたしてたら、男がこむぎさんから離れ、こつちに向かって歩いてきた。

「……きみは？」

「あ、あの……」
なんて答えればいいんだ？パン屋の居候ですっていつのか？

「幸ちゃん」
そんな僕にこむぎさんが気づいてくれた。

「この子、うちで預かってる親戚の子」
「ああ、そんなこと前に聞いたな。僕は、こむぎさんとお付き合いさせてもらってる、紺野というものです」

こむぎさんの彼氏がやけに丁寧に挨拶してくれた。

「あ、僕は富樫です。こむぎさんにはいつもお世話になってます」

紺野という人は、僕に小さく微笑みかけると、こむぎさんに振り返って言った。

「じゃあ、こむぎ。さっきの話、よく考えておいてくれよ」

そして、この暑いのにバリッとスーツを着こなした彼は、僕たちの前から去っていった。

「ごめんね？幸ちゃん。ヘンなところ見られちゃったね？」

こむぎさんは涙をぬぐいながらそう言って、僕の前で笑った。

「いえ……あの……かっこいい人ですね？」

確かになかなかイケメンだった。どこかいい会社のビジネスマンって感じだった。美人のこむぎさんの彼氏だったら、あのくらいじゃないとつり合わないよな。

「そんなことないわよ」

こむぎさんはうつむき加減に小さく微笑んで、そして言った。

「あの人、今年の終わりで海外に転勤になってしまうの」

「海外に？」

「今度いつ日本に帰ってくるか、わからないんですけど」

「そんな……」

彼氏と離れ離れ？僕はあの雪の残った小さな駅で別れた、理衣子の泣き顔を思い出した。

「彼はね、一緒に行こうって言うってくれるの。でも……」

「一緒に行くべきですよ！絶対！絶対それがいい！」

僕の声にこむぎさんが微笑む。

「それは……無理よ」

「どうして!？」

「だってこの店、お母さん一人じゃ無理だわ。私はここを離れない」
「そんな……こむぎさんはもう一度僕に笑いかけると、裏口から店に入って行った。」

25 ピンク色の傘の下で

『あたし絶対幸ちゃんと同じ大学に行く!』

セーラー服を着た理衣子は、僕の隣でそう言った。

高校2年の冬。雪の積もる道を歩いていた、理衣子の笑顔と白い息……

「え?とがっちゃん、就職希望?」

「うん」

「マジ?頭いいのに。大学行くのかと思ってた」

2学期の始まった放課後の廊下。僕は進路指導室に向かって歩いていた。

「中丸は?」

「俺?俺は一応進学希望だけどさ。もっと勉強しとけばよかったって、いまさらながら思うよ」

中丸はそう言いながら頭をかく。この学校の生徒はほとんどが進学希望だ。僕が就職希望だと言うと、先生までが驚いていた。

「田村は短大行くんだろ?」

「へえ……」

「お前、田村のこと何も知らないんだな?一緒に暮らしてるっていうのに」

あんとはあれからずっと話してない。僕は廊下を歩きながら、窓の外に見える、今にも雨の降り出しそうな空を見つめた。

僕が進路指導室から出るころには、雨が降り出していた。

「チャリ、突っ走って帰るしかないな……」

僕は廊下を歩きながらため息をついた。

『あたし絶対幸ちゃんと同じ大学に行く!』

あのころとは状況が変わったんだ。今、自分が進もうとしている

道に後悔はない……はずなのに……僕の頭の中にはずっと、あんの泣き顔がこびりついている。

「はあ……」

もう一度ため息をついて靴を履き替えた。そのとき僕の目に、昇降口のドアにもたれるようにして立っているあんの姿が映った。

「あ、あん？」

あんが顔を上げて僕を見る。

生徒たちのいなくなった校舎内は、静まり返っていた。雨のせいで、運動部の連中の掛け声も聞こえない。ただ外に降りしきる雨の音だけが、僕の耳に聞こえていた。

「なにやってたのよ？こんな時間まで」

「……進路指導室に呼び出されて……」

あんが僕に声をかけてくれた。何日ぶりだろう、あんと話をするのは……同じ家に住んでいるのにヘンだよな……するとあんは持っていた傘を僕の前にちらつかせながらつぶやいた。

「傘、持ってないでしょ？」

「ああ、うん」

「一緒に帰る？」

まさか……もしかして……こいつ僕を待っていたとか？

「一緒に帰る？」

あんがもう一度そう言った。僕がうなずくと、あんは雨の中にピンク色の傘を開いた。

いつも自転車で駆け抜ける土手の上を、あんと並んで歩く。あんは学校からずっと黙ったままだ。僕がちらりと隣を見ると、傘を持っているあんの、左肩が濡れていた。僕はさりげなくあんの手から傘を奪い、左側に傾ける。

傘をたたく雨の音が激しくなった。僕はぼんやりとあんのピンク色の傘を見上げる。やがてあんがぼつりとつぶやいた。

「幸。あんたがうちを出るなら、あたしもあのうち出るからね」

「な、なに言っただよ!?急に」

「あたしもあのうち出て働く」

「ダメだよ!お前は短大行ってやりたいことがあるんだろ!?だいたいなんでお前があのおち出なきゃいけないんだよ!」

「じゃあ、幸も出て行かない?」

「え……」

「幸が出て行かないって約束してくれたら、あたしも出て行かないこいつ……わけわかんない交換条件出しやがった。

「どうなのよ!」

「ど、どうって言われても……」

「ちゃんと答えて!」

「……わかった。出て行かない」

あんが僕の前でほっとしたような表情をする。結局あんの言いなりになってしまう僕……情けない……

あんは僕ににこつと笑いかけると、雨の中をすたすたと歩き出す。長い黒髪や、制服のブラウスが濡れてもおかまいなく、子供のように靴で水溜りをばしゃばしゃ弾きながら……

「あん!待てよ!!風邪ひくぞ!」

僕はピンクの傘を振りながら、あわててあんの後を追いかけた。

26 パン屋に永久就職？

「いらっしやいませー」

「食パン、6枚切りをお願いね」

「はい。わかりました」

店に客が来て、あんがにこやかな笑顔を見せる。

「あら、今日は幸ちゃんもいるのね？」

お客はいつもパンを買いにきてくれる近所のおばさんだった。

「あ、どうも、いらっしやいませ」

僕もあんに負けないような笑顔を作る。あんが横目でちらっと僕を見る。

「あんちゃん、いいわねえ、幸ちゃんみたいな男の子と一緒にお店番なんて」

「えー？そんなことないですよ。この新人、全然使えませんから」

こいつめ……言いたいこといいやがって。

「あら、幸ちゃんのことばは花子さんもこむぎさんも褒めてたわよ。今どきこんな働き者の男の子はいないって。細かいことにもよく気がつくし」

そうそう、おばさん、もっと言ってやってよ。

「だからね、おばさん言ったのよ。幸ちゃん、3人娘の誰かと、結婚してもらえばいいじゃないって」

「「け、結婚!？」」

僕とあんの声がハモった。隣を見ると、あんはガラにもなく真っ赤な顔をしていた。

「あの、おばさん、僕にも選ぶ権利がありますから」

「あら、幸ちゃん。パン屋に永久就職はダメ？」

「ダメとか、そういうんじゃないって……」

おばさんはうぶぶつと口元に手を当てて笑うと、あんからパンを

受け取り、お金を払って出て行った。

「はあー、びつくりした。僕がため息をつきながらあんを見たら、あんはまだ赤い顔をしていた。なんだ、こいつまだ照れてんの？意外とかわいいなんて思ったりして……」

その時、僕の頭にひとつの案が浮かんだ。

「あ、あのさ、あん」

「な、なによ」

「今、おばさんが言ったことだけど……」

「言っとくけど、あたしにも選ぶ権利はあるからね！」

「そうじゃなくて、お前、こむぎさんの彼氏知ってる？」

「紺野さんがどうかしたの？」

あんが不思議そうな顔で僕を見る。僕はこの前こむぎさんから聞いた話をあんに話した。

「こむぎ姉さん……ホントは紺野さんで行きたいんだろっな」

「だろ？俺もそう思う」

「それとおばさんの話と何の関係があるのよ？」

「だからさ……その、こむぎさんの代わりに……俺がこの店に就職するってのは、ダメかな？」

あんが黙った。

「あ、就職するっていつても、給料とかいららないし……俺が花子さんの手伝いできれば、こむぎさん彼氏と一緒にに行けるんじゃないかな、なんて……」

「やっぱりダメか……この新人、使えないって言われてたもんな。」

するとあんが僕の胸にがばっと飛び込んできた。

「そしたら幸……ずっとこの家にいられるよね」

「あん？」

「この家に住み込みで働くっていうなら、採用してやってもいい」

「お前……店長じゃないだろ？」

「うるさいっ！あたしがいいって言ったらいいの！」

僕は黙って天井を見上げる。そうしないと、あんの顔が近すぎて、

へんな気を起こしそうになる。

「あら、何やってんの？あんなたち」

突然裏口が開いて、花子さんが入ってきた。僕たちはあわてて、ぱつと離れる。

「仲直りしたみたいね？でもここはお店だから、そういうことはよそでやってね」

「母さん！」

あんがまた赤くなってた。暴力ふるわなけりゃ、かわいいヤツな
んだけどなあ……

27 それぞれの想い

その日の夜、6畳間に僕と田村家の人たちが集まった。

「だからね、店のことは気にしないで、こむぎ姉、紺野さんと一緒に行つて?」

「あん……」

「こいつに任せるのは頼りないと思うけどさ。あたしもチョコも、もつと頑張つて店手伝うし」

頼りないってなんだよ? まったく、一言多いやつだな。

「でも幸ちゃん、高校卒業したら進学するんじゃないの?」

「いえっ! 僕、大学行くより働きたいんです。だから大丈夫です!」

「私も本当は反対なのよ? 店を手伝ってくれるのは嬉しいけど、男の子なんだし、大学は出ておいたほうがいいと思うの」

花子さんがそう言つて僕を見る。

「幸ちゃんまだ若いのに、今からパン屋に縛り付けるなんて……亡くなつたご両親に怒られちゃうわ」

「そんなことないです。僕、パン作るのも、食べるのも、売るのも好きだし……雑巾がけでもトイレ掃除でもなんでもやります!」

「そうそう! とにかくこむぎ姉は紺野さんと離れちゃだめだよ! 姉さんだつて、紺野さんと一緒にいたいんでしょ!」

「そうだけど……」

こむぎさんはまだ迷つてるみたいだつた。そうだよな……確かによそ者の僕に店を任せるなんて、心配だよな……

「もう! だつたらみんな結婚しちゃえば!」

突然ちよこが口を出した。

「え?」

みんなが揃つてちよこを見る。

「こむぎ姉は紺野さんについてって結婚しちゃえばいいし、あん姉とユツキーも結婚しちゃえばいいじゃん!」

「な、なんであたしたちまで！」

あんが僕の隣で大声をあげた。

「そうすればユツキーは、必然的にうちの跡取り息子。そしてあなたのお義兄さま。うん、なかなかいいアイデア」

「チヨコ！あんた何言ってるのよ！」

「ユツキーはどうなの？どうせこの店で働くなら、あん姉と結婚して、本当の息子になっちゃったほうがよくない？」

結婚？あんと結婚？僕の命はいくつあっても足りないだろうけど

……

「それもいいかな？」

「バカっ！何あんたまでのっちゃってるのよ！」

あんに頭を殴られた。こむぎさんがそんな僕たちを見てくすくすと笑う。

「ありがと。なんだか、あんと幸ちゃん見てたらうらやましくなっちゃった。私も紺野さんについて行ってもいいかしら？」

「あ、もちろんですっ」

むすつとした顔のあんの隣で僕が言う。

「ね？母さん、それでいい？」

「そうねえ……幸ちゃんが本当にパン屋になりたいっていうのなら……」

「はいっ！僕、なんでもやりますっ！あんの暴力に比べたら、どんな仕事でも楽なもん……」

「一言多いんだよっ！」

あんのひじが僕の腹にくいこんだ。やっぱりこいつと結婚するのはやめだ。体がもたない。

東京に初雪が降った12月の終わり、こむぎさんは彼氏と一緒に海外へ飛び立った。

いつも笑顔を絶やさなかったこむぎさんがいないタムラベーカーは、やっぱり寂しかった。だけどいつまでもそんなことを言っ

はいられない。お客さんはいつものように、この店のパンを楽しみに買いに来てくれる。

3学期が始まって自由登校になった僕は、ほとんど学校へ行かずに、こむぎさんの分まで働いた。早く、こむぎさんの代わりになれるように……それがこの家でお世話になった、僕の恩返しだと思っただから。

そして冬が終わり、桜のつぼみがふくらむ頃、僕たちは卒業式を迎えた。

「おい、パン屋の居候」

卒業証書を手にした僕に声をかけてきたのは、かわいい下級生ではなく、あのごつい男。

「なんだよ？花屋の息子」

すると僕を見つめる大樹の目がみるみる潤んで、そして僕の両手をぎゅっと握った。な、なんなんだ？

「あんのことをよろしく頼む！」

「え、ええ？」

「俺は今でもあんのことが好きだが、あんがお前を選んだなら仕方ない。あんのことを……あんのことを……」

僕の前で泣き出す大樹。周りの生徒たちが遠巻きに僕たちを眺めている。

「わ、わかったから……手、離してくれないかなあ？」

「本当にわかってるんだろ？俺が今ここでお前をぶっ飛ばすのは簡単なんだぞ？」

それはかんべんしてほしい。大樹は握った僕の手を、痛いほど強く握りしめる。

「わ、わかった。わかったから離して……」

「大樹と幸ー！」

遠くからあんの声が聞こえた。

「なにやってんの！？写真撮るってよー！」

大樹が僕の手をぱつと離す。助かった……殺されるかと思った……
「おう！今行く！」

大樹が返事をして歩き出す。僕はそんな大樹の背中をぼんやりと
見つめる。あいつ……泣くほど好きなんだな、あんのこと。そして
僕の気持ちは……

何気なく空を見上げたら、真っ青な空にすうっと飛行機雲が伸び
ていた。

28 あんと結婚するんだよ？

自転車をキコキコこぎながら土手沿いを走る。たった1年通っただけの通学路。なのに僕にとって、ここはふるさとと同じくらい大事な場所になっていた。

「あん？」

自転車を止めて土手をのぞく。草むらの上に卒業証書の筒を置いて、制服姿のあんが座っていた。

「なにやってんだよ？こんなところで」

「べつに」

あんがつぶやく。僕はゆっくりと土手を降りて、あんの隣に座る。あんは何も言わないで、ただ黙って正面を見つめていた。

僕たちの前をゆつたりと川が流れる。反対側の川岸に並んでいるのは桜の木。まだちょっとお花見には早いよな。目の前に広がる緑の草むらが風にふわっと揺れる。

その時ふと僕の頭に、幼い頃のアンの顔が浮かんだ。あんは、たんぽぽの咲く土手に座って、僕に向かってこう言った。

『じゃあ決まり！幸ちゃんはあるんと結婚するんだよ！』

突然僕の胸がドキドキと高鳴る。ホテルで見た夢……あれは、もしかして、たぶん……

「「あ、あのさ……」」

僕の声とあんの声が重なった。僕たちは一瞬あせって顔を見合わせる。

「なによ？」

「あんこそ、なんだよ」

「幸、先に言いなさいよ」

「……」

春先の少し冷たい風が吹いて、あんの長い髪が揺れる。

「む、昔のことなんだけど……」

「なに？」

あんがどことなく落ち着かない表情で僕を見る。

「俺、あんとなにか約束したかな？」

「……………」

「お、覚えてないならいいんだけど」

「覚えてるに決まってるでしょ!？」

僕が隣のをあんを見る。あんは頬を赤くして顔をそむけて言った。

「なんで今、そんなこと言うのよ!?!?なんで今、あたしが言おうとしたこと言うのよ!?!？」

え、うそ……………あんも同じこと考えてた？

「あ、はは……………すごいね、俺たち」

「……………」

おい、こら、なんとか言えよ、あん。

「で、でもあんなの、子供の約束だもんな？まさかあんなの今でも本気で……………」

あんがすくつと立ち上がる。あんの握ったこぶしがかすかに震えている。やばい?なんかわかんないけど、やばそうだ。

「あ、あん？」

僕はあわてて立ち上がった。あんは真っ直ぐ前を見ている。そんなあんの顔を、僕は恐る恐るのぞきこむ。

あんは泣いていた。目を真っ赤にして、ぼろぼろ涙をこぼしていた。

「あん……………泣くなよ……………」

僕はポケットからハンカチを取り出そうとしたけど、中から出てくるのは10円玉やガムの包み紙……………ああ、ハンカチってのは、こういうときのために持つておくべきなんだ。

「幸のバカ」

あんが泣きながらつぶやく。

「ごめん」

「なにがごめんよ?わかってんの?」

「……………うん」

ほんとは初めからわかってた。初めてこの家に僕が来たときから、あんはずっと僕のことを……………いや、会えなかった長い間も、あんはずっと僕のことを……………あの僕の生まれた田舎町でした、幼い約束だけを胸にしまって……………

『幸ちゃんはあると結婚するんだよ!』

『うん』

僕は指で優しく、あんの涙をぬぐってやった。こんなとき、気の利いたセリフでも言えればいいんだろうけど……………言えない僕はあんの顔に自分の顔を寄せて、そっと唇を重ね合わせる。

ほんとは僕は知っている。あんが泣き虫で寂しがり屋で、実はすごく照れ屋なこと。そしてそんなあんのことを、僕は好きになったんだ。

唇を離れた僕とあんの目が合った。あんは真っ赤な顔をして、でも少し微笑んで、僕に向かって「バカ」って言った。

28 あんと結婚するんだよ？（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます。

このお話は次回で最終話となります。

あとほんの少し、お付き合いいただければ幸せです

明日（5日）の更新はお休みします。

よろしく願います。

29 一寸先に幸せ

『一寸先は闇』 未来のことは全く予測することができないことをいう。

結局のところ、あんに逆らえない僕。なのになぜかあんと付き合ってる僕。去年の今頃は、理衣子のことが好きだったのにな……：人生なにが起こるか分からない。あんは僕にとっての『闇』なのか、それとも『光』なのか？

「ほんとにあんたで大丈夫かなあ？」

焼きたてのパンを店に並べている僕の周りを、あんがうろうろしている。

「なに言ってるんだよ？ほら、ちゃんとパンだつて焼きあがってるし」

「それはあんたが焼いたんじゃないでしょ？母さんが焼いたんでしょ？」

「ごもつとも……僕はまだ見習いの分際ですから。」

「それよりお前今日から学校だろ？さっさと行け」

「でも、この店員じゃ店が心配で……」

「うるさい！早く行け！」

僕はあるの背中を押して店の外へ追い出す。一瞬春の暖かな風が吹いて、あんの長い髪が僕の目の前になびいた。

「なに？」

あんが振り返って僕を見る。

「え？」

「離してよ。あたしの手」

「あ、ああ……」

僕はなぜかあんの手を握っていた。もう少し一緒にいたいって思うなんて……毎日一緒にいるのにヘンだよな。

「じゃあ、行くよ？」

あんが僕の顔を見て言う。

「さっさと行け」

あんは今日から短大へ通う。実はあんの夢は保育士で、保育園の先生になってたくさんの子供と触れ合いたいそう。僕を張り倒す、あの恐ろしいあんからは想像ができないけど、だけど近所の健太と遊んでる時の笑顔を見たりすると、なんとなくわかる気もする。

「幸」

あんが僕の名前を呼んだ。春の日差しの中で、あんはかすかに微笑み、そして僕の唇にチュッとキスをした。

「店、頼んだよ！」

「お、おう。任せとけっ」

あんはふふつと笑うと背中を向けて、スキップするように歩き出す。ああ、いつもこんなにかわいいあんでいてくれればいいのになあ……

「なんだか暑いですなあ」

ぎくつとして振り返ると、ちよこが制服の胸元をぱたぱたしながら僕を見ていた。

「は、春だからな」

「暖かくなると、堂々と店先でキスする人たちも出てくるわけね」
ちよこはため息まじりに言いながら、僕の脇をすり抜け店の外へ出る。

「じゃあ、行ってきます。お義兄さま」

「だ、誰がお義兄さまだよっ！」

ちよこは僕に向かってぺろつと舌を出して笑うと、元気よく走っていった。そういえばちよこにも、春休み中に彼氏ができたらしい。同じテニス部の王子様って言ってたけど……一体どんなやつなんだ？

僕はふうつと息を吐いて、あんぱんを店に並べる。その時壁の隅に、どこかで見たとような落書きを発見した。たくさんの花に囲まれて、笑っている男の子と女の子の絵。

「ああ、それはね、あんが小さい頃、描いた絵なのよ」

いつの間にか僕の後ろに立っていた花子さんが言う。

「お父さんとあんの結婚式の絵なんだって。あんはお父さんが大好きだったから」

そうかあ……それでこの女の子、嬉しそうな顔してるんだな。

「そういえば僕の部屋にも同じ絵がありますよね。あんって、ほんとお父さんのこと好きだったんだなあ……」

「ふふっ、あの絵はね」

花子さんが僕を見て笑う。

「お父さんじゃなくて、幸ちゃんなのよ」

「へ？」

「あん、お父さんと結婚するのやめて、幸ちゃんと結婚するって。

お父さん、ふられちゃったの」

僕の顔が熱くなる。そしてたんぽぽの咲く土手で笑っていた、幼いあんの顔が頭に浮かんだ。

「さ、お店開けるわよ！頼りにしてるからね、幸ちゃん！」

花子さんが僕の背中をぽんつと叩く。

「は、はいっ」

窓から差し込む春の光。店の中に漂うパンの香り。僕の胸がほんわかと温かくなる。

タムラベーカーリー、まもなく開店です。

29 一寸先に幸せ（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。いつも読んでくださった方、お気に入り登録してくださった方、評価、感想くださった方、本当にありがとうございます。

作者は高校生のころ、小さなパン屋さんでアルバイトをしていました。

学校からバイト先へ行くと、いつもパン屋のおばさんが「お腹すいたでしょ？」と、パンを食べさせてくれました。今思えば、働きにいくより、食べるにいつていたみたいです。そんな、今はもうない、懐かしいパン屋さんの思い出を、ちょっぴりだけこめて書きました。

こんな作者の、たわいのない話にお付き合いいただき本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7974k/>

いらっしゃいませ！タムラベーカーリーへようこそ

2010年10月8日11時46分発行